

雅間錄

昭和二年五月上院起筆

三

特別
14
1919
392



雅聞録三

昭和二年五月上院起筆

のハうらむし四十五年前余が高田の支社に担任
 の際深山田首大首(五)と(四)より余に定めてる未だ
 ハ大幅に志物も(七)と(六)編輯の向に掲げおいて
 かまへいと(八)の失せり尋ねぬるま由も(九)其の詩
 十(一)記懐かせず(二)んを得るす(三)今(四)の容易に
 あり(五)こと(六)らう(七)れ。偶(八)に高田の支社に
 折(九)高田の支社に初野(一〇)此詩の掲載あるは
 へ(一一)んと(一二)を(一三)依(一四)託(一五)し(一六)たる(一七)ま(一八)左(一九)の(二〇)言(二一)を(二二)定(二三)め(二四)せ(二五)り



田新新聞

市島兄の越後へ行くを送る

小川為次郎

宮へは花の可きりを古郷へ
つたへまほし〜と歸る君あふ

昭和 年 月 日

高田市奥服町
電話 八四三六
一四番

ふ、前のわ歌に全々を忘るゝおはか、まゐりあつ
たのを快とまき、あ友の既と白玉梅の、の人とまう
た、一浦慨然とまを得ぬ。

○此刊の集古といふ能は、新原又仙の一文が掲げ
てある。その興味の味もあるから、爰に収めおく

酢 莖

予往年家業の爲め京阪へ染文様の視察に出懸けしこと屢々であつた。其の砌、彼の地の友人にして頗る食
道樂に篤き者より供された酢莖と名付けし漬物、其の味真事に軽くして美なりしこと永く記憶に消えやらす
聞けば此の酢莖は、京都名代なる蕪菁の葉莖で、春の花散る時分、温陽につれて葉莖の長く軟く延びた所を
京の水に塩を和へて焦茶色に變るまで漬込み、筍の市に估らるゝ頃、膳に上すもので、其時の味が即ち是で
あると誇らるゝのも極めて其の價ありといふべしである。腥サで對比すれば彼の眞名松魚と食膳の大關をう
たはれんと想ふ。故に酢莖といふ沙汰の出る度に注意をはらふも可笑いやうだが、近日或書を見ると、酢莖
について恠いふ事が記してある。下學集飲食門に蓋（スイノキ）酢莖は青菜に溜り酢を加へて二十日ほどね
かす。納豆の如く白味引て粘り出るを飯の上に置いて喰す。木曾福島の奥、御嶽のあたりにて製しある事な
り。土俗の稱へにはスノキといふ。此れで見ると酢に和へたものだが、京の酢莖は其の地の水と鹽の熟しや
うに因つて酸味を生ず。この柔かな味と木曾のものとは定めし味に相違はあらんか。記して後の樂とす。

何年菩提

この品はナンボやとは京訛りに聞く所だが、之は何程といふべきの略語轉訛だらうと想つて居つたが、更

に此のナンボに就いて別箇の語義を見出した。炭俵集に

瓜の花これからナンボ手にかゝる

の一句があつた。ナンボは何年菩提と云ふのを畧省したもの、即ち何菩の字義で、其の何年菩提は世に久敷
なる事を譬へていふたもの、「何年菩提知れぬ朽の木」これも一ツの証句である。之をもて見ると京訛りのナ
ンボは全然言葉の遣ひやうが違ひ、關東にてナンボなんでも其んな事はありそうも無いといふのに相具し、
創めて何菩の語義が解釋され得たものである。

すたれた名物

兩國の幾代餅は風來山人これを傳へ、麴町の助宗焼は黃門記の劇で今に知られてある。余物心つきてより
江戸の喰物の名高きもの、逆も十指に俵へるものでないが鳥渡思ひ出せたのは、

土手の金鰐やき

柳原の鯛の付け焼

靈岸前の一本温鈍

吾妻橋の苞蜆

代地の松の壽司

是等の外想ひも出せず、又余の詮索の届かぬものもあろう。中で當時に言囃されたのは、土手の金鰐焼だろ
う。明治の初期、吉原土手に床見世軒を並へて金鰐を焼て居つたもの、一時は吉原名物竹村の煎餅よりも流
行を極め、引手茶屋また粹者の向より、青籠に詰め、御存じよりの小撚札をつけて贈られたものだ。偶ま好
事家の手に看醜い印面の金鰐屋包紙が今尚保存されあるのを看かけることもある。その金鰐は小形の方が味
か旨かつた。斯く土手に金鰐屋が創め出した時代は何時だつたか知らねど、遊手の多き往來に太福でも無か
らう。焼たての温かいのを頬張るに可らうと思付き、今なら五錢もする餡ものよりも大きかつたのが、四箇

一錢で賣つたのが人氣に適ひ、焼てもよく買れる繁昌を羨み擬て、次第に同業殖るとも倍々捌けたものだと郷土の者は言はれた。

其次は柳原通りの鯛の付焼だろう。夫は金鰯屋よりも五六年早く廢れたやうだ。此つけ焼は、吉原土手と違ひ般昌な町柄故に、喰意地の張つた儕輩に喜ばれ、柳原通りに幾軒も暖簾を編懸かし、鯛の焦れる匂ひが往來を蔽ふたとまでいはれよう。之は鯛を炊ぎ白水に漬け爛し、山椒醬油を加減した垂液の中へ染ては炒き染ては炒きすること蒲焼のやうにした。近隣は商家密稠な所で、其の匂ひの四下に及ぼし、年期の若衆乃至往來の人脚を滞らせて、怒い餓氣の口に馴染よりも、其の香しい軽い味に多く評判を買ひ、家父なども路を隔て、態々柳原へ下卑藏に租かれた者だ。

夫から、深川靈岸前で、淡穢い舗の懸行灯に『太うんとん』と記しあり、其の温飩を注文すると、尋常の井に温飩かけとして客に供すのを、箸で挿むと女の褌のやうなのが一本あるのみ、嚙切りつゝ食ふのだ。何の想付きで這樣的な温飩を賣出したものか、是でも一時は名を稱へられたものだが、明治二十年頃退店して終つた。

吾妻橋際に、蕪苞に蛸を盛り床舗や簞端へ盤臺の上へ並べ賣つてたものだ。雪が紛々として枕橋に下駄の痕を印し、待乳の森の化粧した暮色とか、又、江東途遠く梅見の還る左右、蛸の苞を提げてゆくなど、今懐ひ起しても雅致があり詩趣を存したものだ。其の蛸も角田川に白魚亡びて、頓て五六年も経ぬうちに種切れとなつて終つたやうだ。

代地の松の壽司は、柳橋の歌妓が江戸に覇を延して居つたころの聲價は、素晴しいもので、此舗の呼物は鯖の酢である。今日大阪あたりから苞産にされる鯖の鮓とも別に異りはないうやうな氣がする。それが當時は非

例なる賞味かたで、席上鯖の鮓を喰ふ江戸ッ子は、侍べる婦が一口に戴けぬといへば、脇差をぬいて二ツに割き刀尖へ刺し食へと、假令にもしさうな新鮮なものとされた。亦松の壽司を用意し、猪牙舟で山谷へでも乗込まうとせねば粹な仲間に出されぬ位と迄扱はれたものだ。

余が少年の折、静岡から歸省した歡びにと、松の壽司を饗まふと、伯母なる人に合乗の人力へ乗せられ、同店へ上り、お喰べくと強られたことがあつて、鯖の腥さと皮の噛まれぬで、小兒心に用倦んた事があつた。氣の無い余の如きに當時の江戸名物は嬉しい感じがせなんだも異なるものである。夫程の松の壽司も、酢の氣淡くなつた傾きで代地の老舗も明治の廿四五年に閉鎖して終つた。

一體食物の流行衰退は、人々の驕奢と質素に起因するものであらうか、其の由て来る根本は、最初に生み出した調味の上に氣を張らす。老舗を笠に着て遂に疎畧になり勝な所以であらう。一旦名物と呼ばれたものが他の口舌に倦るゝとは云へ、その衰亡するのは餘り榮たる事で無からうと余は信ずる。

○又仙の淡七壽司のこととて、進んでみるが、毎日のこととて、
ら、前夜酒を飲めよと、此の酒は、どうも、酒を、
ある朝、酒を耐えて飲めよと、酒を、
畫い、麦酒一瓶を、おすか、おんと、例ひ、

この酒の下物、樽が所々あるが北次は酒の望
日出と似て目を橋を教養しつゝ、
と想ひ出したりの、七の魚河岸、寿司を
の家が三四ある、まゝに入りビールをあつた
一魚も、並んでよく末房といふ家に入り、
を設けてある、暖い魚式の小屋があるが流石に
材料、新鮮で魚乾をつけた寿司、うまの
比べ、飲過ぎの酒のち物といふ、北上の
よと感と、獨り、二の條を橋の、カワイ
つといふ、酒のち物、ニリンの酢漬を
用ゐるといふ、いづれも同じこと、
よが胸をすかせる、好下物がある、
此の

○は、ビスマークのヘーリングと名づけえ、
頭、酸味を帯び、
○獨り、ニリンで田中、飯橋士か、
の獨り、某教授を、
あと、教授の、
か、終、
私、日本、
ハ、
○、
を、
、

る。金澤人で無鐵砲で有名な男に森口某と云ふものがあつた。雅邦に就いての話は、今より約三十年ばかり前のことであ

海軍兵學校の生徒であつたが中途退學を命ぜられ、これと云つて定まつた職もなく東京市中をうろつき廻つてゐたが、斯る間に壯士の仲間入りをして、議員の選舉でもあると命を的に働き、相應収入があると旗亭へ押し上り酒を呻つて忽ちにして蕩盡してしまひ、選舉騒ぎなどなく、隨つて困窮してくると知人舊友の間を廻つて合力を頼むといふやうなふうであつた。ところが此森口と云ふ男、その稚な友達で本郷の龍岡町に住した余の親戚の工學博士近藤仙太郎方へ赴き、一圓二圓の合力を乞ふこと屢々である。初めのうちはおいそれと應じてゐたが、餘りに度々なので遂には近藤も愛想をつかし、或時のこと『今後は何か代りのものを持參しなければ應じ難い』と云つて斷つたのである、彼は詮方なく悄然として戻つて行つた。

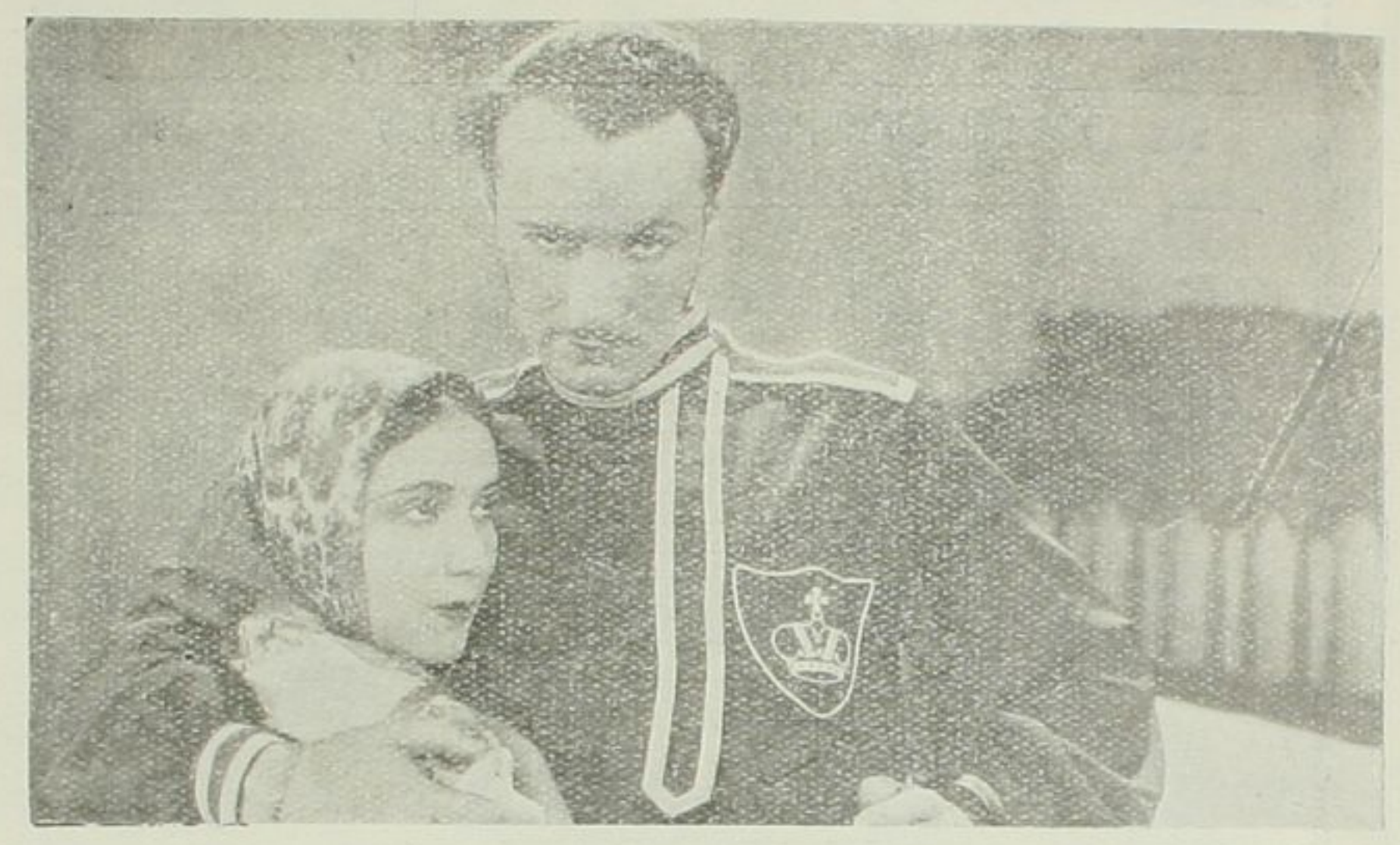
その歸途のこと、同町に住した橋本雅邦の門前を通つたが彼はその門表を見て、不圖雅邦が畫家であることを思ひ出し、窮餘の一策とでも云ふのであらう、面會して具さに刻下の窮狀を述べ『生活の資に充てるのであるから、どうぞ一と筆揮つて頂き度い。』と揮毫を乞ふた。雅邦は『宜しい、それでは何か書いて進ぜやう。』と直に承諾して、傍らに在つた唐紙を延べ、全紙二枚に粗畫を描いて與へたのである。けれども彼は、雅邦の畫家であることは知るも、斯界に於て如何なる地位の人であるかは更に知る筈がない。彼はその二枚の畫を携へて直に近藤方へ引き返し『實は今近所の橋本といふ畫家に此様なものを描いて貰つたから、どうかこれで何程なりとも貸して貰ひ度い。』と只管頼んだ。そこで近藤はそ

れを受け取り相當の金子を與へて歸したのである。

その後、近藤は斯く斯くの事情で雅邦の粗畫が二枚手に入つたからと云つて、その一枚を余に贈つて呉れた。披いて見ると高山彦九郎の三條の橋に於ける圖であつたが、どうしたことか彦九郎は橋の上には居らず、橋の袂で平伏して居るのである。これは少し變だと思つたが、雅邦が描いた時の動機を考へるに至り始めてその理由を悟り得て、手を拍つて賞讃し流石雅邦の名人たることを知つたのである。謂はゞ彦九郎は當年の壯士である、森口は明治の壯士である。壯士が橋本へ來て頭を下げて居るところを描いて與へたのである。武骨の森口は元よりそれが如何なる圖であるかは知らず、近藤も亦雅邦の當意即妙の圖に氣づかず、これを余に贈たのである。余は今なほ此名幅を珍藏して居る。——此逸話は是非雅邦の傳記中に收めて後世に傳へたいとおもふ。

ロトルストイの名作復活
中の世主人公カチウエー
の暗打抱月松陰を心
つてしるゝ其後流

十二



ユナイテッド・アーチスト映畫
レオ・トルストイ伯原作
ファイニス・フォックス氏脚色
エドウィン・ケイリユー氏原作
ドミトリ・ネフリウドフ
カチウシヤ・マスロワ
スケーンボフ少佐

活 全十卷

略筋——若い公爵ドミトリ・ネフリウドフは聖彼得堡から伯母の家に避暑にやつて来た。そして召使の百姓娘カチウシヤと戀に陥つた。しかし堅愜の伯母さんに割かれてしまつた。其の後露土戦争が起つてドミトリは戦線に向ふ途中再び伯母さんの家を訪れた。彼は既に前の純真な青年ではなくなつて居た。そして其夜巧みに伯母の眼を掠めてカチウシヤと喫つた。彼が戦線に在る間にカチウシヤの側姪したことが伯母の眼にとり家名の汚れと無情にも放逐されて了つた。カチウシヤはドミトリが戦線から歸る途中停車場で逢はうとしたが他に増す花が出来て居た、今彼女には一瞥すら與へなかつた。カチウシヤは其後嬰兒を生み落したが死んで了つた。失望した彼女は生計を求めて轉々として遂に闇の女と迄落ぶれた。そして運命は飽く迄も彼女に辛く彼女は富祐な商人を殺した言ふ罪に問はれた。そして不思議にドミトリが其の裁判に立會ふことになつた。彼は犯罪の根本の原因は自分にあるを悟つて大に辯護したが、甲斐なくカチウシヤは西比利亞流刑に處せられた。カチウシヤが多くの流刑囚と共に西比利亞に送られる日ドミトリは深く自責し彼女を救ふために彼女と結婚をしようと思つた。二人の胸には初恋の日の甘い想出が歸つた。然しカチウシヤは此の戀の再燃は永續せず忽ち消ゆることを知り寂しく西比利亞行に加つた。

監明 山野一郎 徳川夢聲 伴奏曲目選定 貫洞喜代治

雅邦に就いての話は、今より約三十年ばかり前のことである。金澤人で無鐵砲で有名な男に森口某と云ふものがあつた。

海軍兵學校の生徒であつたが中途退學を命ぜられ、これと云つて定まつた職もなく東京市中をうろつき廻つてゐたが、斯る間に壯士の仲間入りをして、議員の選舉でもあると命を的に働き、相應収入があると旗亭へ押し上り酒を呻つて忽ちにして蕩盡してしまひ、選舉騒ぎなどなく、隨つて困窮してくると知人舊友の間を廻つて合力を頼むといふやうなふう

れを受け取り相當の金子を與へて歸したのである。その後、近藤は斯く斯くの事情で雅邦の粗畫が二枚手に入つたからと云つて、その一枚を余に贈つて呉れた。披いて見ると高山彦九郎の三條の橋に於ける圖であつたが、どうしたことか彦九郎は橋の上には居らず、橋の袂で平伏して居るのである。これは少し變だと思つたが、

時の動機
つて賞讃
は彦九
壯士が橋
である。
贈たたの
近
逸話は是

VOL. 7 MUSASHINO WEEKLY NO. 18
(A Week From Apr. 2 to 1927.)

A United Artists Picture
THE NIGHT OF LOVE in 5 Reels

Montero.....Ronald Colman
Princess Marie.....Vilma Banky
Duke de la Garda.....Montague Love
Dame Beatriz.....Natalie Kingston
Gypsy Bride.....Laska Winter
Gypsy Lancer.....Sally Hand
Jester.....John George

Story and Scenario by Lenore Coffee,
Directed by George Fitzmaurice.

INTERVAL MUSIC
SELECTION ERNANI
by VERDI.

A United Artists Picture
RESURRECTION in 10 Reels

Prince Dmitri Nekhludof.....Rod La Rocque
Katusha Maslova.....Dolores del Rio
Major Schoenboch.....Marc Ma Dermott
Aunt Sophia.....Lucy Beaumont
Aunt Narya.....Vera Lewis
Princess Olga Ivanovitch Nekhludof.....Clarissa Selwynne
Princess Sonia Korchagin.....Eve Southern
Old Philosopher.....Count Ilya Tolstoy

Story by Count Leo Tolstoy,
Scenario by Ilya Tolstoy,
Directed by Edwin Carewe.

上 映 順 序 (四月廿八日)	一 戀 悲 舞	二 愛 劇 武 野 管 絃 樂 隊 演 奏 エ ル ナ ニ の 抜 萃 曲	三 復 仇 武 藏 野 館
九 石 川 之 助	九 石 川 之 助	山 野 活 松	山 野 活 松
九 石 川 之 助	九 石 川 之 助	山 野 活 松	山 野 活 松
九 石 川 之 助	九 石 川 之 助	山 野 活 松	山 野 活 松
九 石 川 之 助	九 石 川 之 助	山 野 活 松	山 野 活 松

活
也
心
活

行し、随つて此の世を去る人の名も著し人々知らるる。此の
新編の武蔵野管絃樂隊の映画を翻説と供す
余も如心と伴つて利り思ふ、こんなにも多く映画
を免つた上の歴巻る、此の劇行々の富喜
あり、大体の筋の、此の映画にあり、
いふ、旅の者(靴工と問答の對子)ハト
ストイの事、美の子と云ふ、成るるとお顔
甚れ似たり、余偶々随つておめんとして、就寢
田村花を稱す、雪中、西比利亞、復讐の
光の景をえて、女の威を深ふなり。



向崎 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生 先生

○余が才二の随筆は三月下旬迄の稿と後リて以来毎
 日筆止。昨日漸やく稿を脱す。日を費す定日
 六回、才一隨筆は三十日間を稿を脱し、
 二の二倍の日子を要し、才一隨筆の稿は
 才一隨筆の稿と間を合ふよの多かりし、今が
 のに全部書き直したるよの多きを以て、衝
 口甚し「意外」の二篇の殊に書き直したる
 よの多かりし、才一隨筆の稿は、
 才一隨筆の稿と間を合ふよの多かりし、今が

- 一 感興ある迄懐
- 一 猶宗旧夢語
- 一 固者号の折々
- 一 執味淡採也

一 書外報

一 衡口書

以上の内衡口書が漢文崗しの文体より頁
数未詳算りて合立るを綴る標題七
未詳決せり、有あ木中一りり 五月十日録

○近年者店：長方形の園林文庫一の巻記ある
籍を往と見る、此の印記ハ何人のよか知り得ずし
ハ、今次東京本教寺園者の主に出しりる者籍
をえんハ此印記あり、初めは日寺のよかを
知り得ずる。

○高田路少ハ創主漢四十五年ハあるといふハ其の
創刊と異つ比余に寄稿を請ふて未だ、高田路少

：就てハこんと行々の如、進徳文をえり、字のせり
つり、大依ハまはせり、四十五年と云ふ
を聴てハ年の風の真ハ動き、あめハ政改り
坊をいを進徳一筋と定めた、勝又ハ
中時自合ハ廿三年の荒年ハあつた、ま
此は、社長ハあつた、あ時ハ民の軋
轢ハ極力ハこを、政府の神託ハあ、
大依ハ、新ハ紙條細ハ未だ有、政改烈ハ
政改を行ふハ、客氣ハえり、年ハ壯ハ自人ハ
此のワナハ羅ハつた、無ハつた、此ハ
ハ、知人ハ、獄案ハ、修め
つ、此ハ、あ時ハ、記帳ハ、式許ハ、

得て、その次の物語をあらわし見せ。丁が高田
新又社から山田真南が秘日の高田と外々時のは
詩の言を得た。見えとも文中より叙めあめ
の和の意氣を形本表現するの材料に充てた。
四十五年とあると刻十の印入、皆なこびる分り三
子とあるも、きさの、唯は四十五も字毎の兄
この故人いひと、此の新とあるのみと、後人の
直境又の大意である。

○田中智多ハ四特論者を以て自ら任して
つが、尾崎の号や市長のあつた時日本
橋を改定することが起つた、其時智多が建
議として日本橋の江戸の真ん中、見えか江戸
見氣を代表するものとしてあるから、お

第九千三百二號

東京日日新聞

五月十五日

明治三十一年

四百九十九號

五十年前、大久保利通卿暗殺當時の本紙

(この裏第一面に「紀尾井」)

の橋の... 敢て妨げ... と建... 黄金の... 盗人が... 黄金で... 江戸の... 盗人が...

○前掲... 十四日... 大久保利通... 紀尾井... 大久保利通... 紀尾井... 大久保利通... 紀尾井...



退散新の帰省に節
 籠飯篠田主人庭園
 榎先生の榻に席を
 設け余を中へて一酌
 をとら余偲て一女児を
 携ふ親族の女子古来
 つてあり、即ち其て其人
 需に應ず、日茂花
 續拾杯中、こ入り地上
 亦茂花を以つて苗を
 為す、由者守の一快
 也

日雨中無新、散葉銀生と列、城を貫
 らせ、悔ふ偶々、家入如と出、在り、新小夏
 十數枚、酒語を録し、て、所、外、と、換、ふ、酒、語
 左の如し

昭和二年十月十日

醉翁不知天地寬

従ふ多因坐地来

酒氣沸、十指上

若、不、日、飲、醇、酒、後、乾、安、帰

碎倒古乾地

是、此、分、計、干、鐘、酒

酒、久、福、禄、長

碎、眼、無、債、人

酔心風景好

酒中時有得物の後何未

夢飲車海以爲酒

人間路空作酒杯寬

歡醉有酒情

但得酒中教古杯六者持

ちも手惟手酔重長消

○一夜危険多き年齢と題する一書を讀む此書は北歐丁格の女流作家カリン・ニコアエリスの著る「エニシ・リント子」といふ婦人が四十二の年をこゝろに離縁を結ぶて獨棲の事をも其日誌や手簡を綴

り合ひして去向した体こそある。日本心七、三十後家の主として四十後家の主眼」との公認のあること、東西とも別處の年記第一の事をも婦人の心記必用が裏してくるものと見く、日本心は行くある情や因習や倫理が容易に離縁の行をえさのけたと述ぶ婦人の人格が認めらるることである。此の著者の如き婦人をいふ現するこゝとある。此の譯者記と云ふと庶幾いふものが今いふ通りである。此の譯者は大正四年に出た、日英年記と并版に附さんたものである。早く出てゐる、西洋心は此の一時の事を行かんたと序うえしてある。

○以上の者中微笑と題したの記がである

徳の言語を失くして喰らう一個の微笑を言
現のすことハ能く。微笑ハ女性間ハ托ける
共満の記憶ハある。此に能ハ妻性以外
ハ何人ト表し得るものもあるから安心して
女ト使フ事ハ可シカシキ。

微笑ハ女性のみが解し得る一種の言語ハあ
る。此に微笑の中ハ本能や罪惡を透か
してある。而して表す事ハ徳義ハ大ニ其
意ト反射してあるものがある。
妻性ハ女性間ハ愛の云々の事ハ技巧的
微笑の影に隠して身と安んじて獲る
ものがある。

男の微笑する事ハ下キである。いくらか
親切さうに其の満足をさうにあり優
しさうにも話すことハ能く。微笑してか
らと云つて過利の事ハ陰險にもある
もの。

女の愛からハ無く偽面を顔と着ける
から、女は精神の微笑の中ハ優位があるの
である。其の精神ハ肉體から笑つてゐ
る場合ハ多シ。

誰か考へを揚げて考へるものがあるが、考へを
揚げて微笑するものも多シである。妻性ハ
人が自己の隠陰や七蕪ハ倒してゐるもの

を風と面して敢て微笑人としてあるの、女性
と云ふ恐しい団体の特有である。

若し男がつらく四十歳以上の女を考へて見
るやうな場合をいふ……
喜の大膽に此をいふ言として、巨く地球の表
面を二人として根本的に女性を解して得る男
は無い。唯二人の女を解して得る唯一人の男
も無い

十分解する……と云ふが、若し降が花を飛く
と一つで、花の芳香のいと蜜の味との区お

を知る位か、山の山はあふ。
男か女を解する……と云ふ……到底能きさう
言ふかあるか、女の女。

喜共の個性といふ、よふ恐も、喜の性質
を時々、の気分を信つて名つけよ。病
的の反応、不満も、苦痛、不信用、喜か、恐
らく、女原因を考へた、あう、女上正
直も意味する、物候、の恐も、喜も巧ぬ
る、詐欺の分子を念見ひる。
斯く、男世間、信實か話さう、女あう
うか、男女の關係、既、詐、の所、ある、黙

色する所である。体裁を飾る所である。
男女両性の間を切つても截らぬ反抗心が存
在してゐる。人生の生き筋はさうなものである。
る。生きる以てゐる。其を美化する方が容
易く便宜であるから、人々此反抗心を美
化してゐるのだ。係し及抗心を美
ある世の中に存してゐる者及び例へば西性
が最高級の運命を行ふ其親友の瞬間
むかふ片々其間に横つてゐるものである。

男に比べて女は如く自己に頼る心を有てある
ことか能る。女は其か能ぬ、抑々誕生の時か

母の胎内にある時ある。女と云ふよ
拙れは出来てゐる者及び其か其後教育
に依つて、女同志の交際を依つて、意見を
供与する物に依つて出来損ふつて終ふ
のである。

男は一概と極く暫くしてあるが、何等の
隔意を有てゐる事か能る。多くの抽斗
や戦ひのあつた歴史のやうに打ぬけして死
せる。現在も色々々悉皆女に海を渡
ふ。女に女は感傷の許す範囲に止めて
おき、決して其以上の告白は行らぬ。

女の羞恥の感は男のそれと全く別種のものだ、
女が男に對して自己の秘蔵する思慕を打明か
すことは親族間が世間を犯すよりも甚
しいのである。係りし時として他の世間の其秘蔵を
を思ひかけ無く言つて終ふことがある。
女同志の友誼と男同志の友誼とは全く比へ
る言が出来ない。女同志は何處までも滲入
する言の要求するものだ。

昔も男の衣服が影印者せぬ如く、男の感
情生活も外部の言が助力を有つて
ある。所が妻や婦人となるると大に趣かわ

ふ、妻は別な衣服を着けた時、既と同一
の者か無い。装飾着けたる装飾と相
應しい性質を持つてゐるのがある。妻共は
外部的な偶発的な言に従ひ、變つ
た方法で振舞う行つた言の言流した
りしてゐるのだ。

或女が女友達に打明法をする時は、向
ひ合つてゐる時と、昔時時刻に小こま
書い出さる時と、同じ友誼にあらはれ
た方法と女言葉があらはれがある。

女根據の精神のあらはれは、純粹

る形骸上の性徳に基くのである。

涙とまゝそのの悲とく善良は、確たる効力
のあるものか、而かも毒物がある

涙は自然の年か世性、其の以ては毒物の
特有の産物である。

以上

亮し、リントチの婦人觀の内から、其を修めを
少しく抄録し、其の婦人が往々の生
白をしてみろのを見ても、婦人の複雑なる心理
此用が如何か、今作婦人の心理を複雑
のよ、無の、まゝをみる、泪と見るの、日、活、在

のよ、その者破、一、い、から、か、ある、此、婦人、ハ、良、操
と、疵、か、無、つ、れ、の、を、ある、け、ん、ん、に、い、ん、と、年、若、い、工
學、士、の、志、を、一、つ、の、の、で、ある、工、學、士、も、亦、同、し、田、ひ
又、あ、こ、わ、ん、れ、の、の、を、ある、保、し、婦、人、の、飽、ち、か、志、を
打、消、す、こ、ち、つ、と、め、た、其、の、複、雑、な、心、地
ハ、悲、し、む、れ、の、を、説、を、描、く、の、眼、目、に、取、り、
よ、の、の、あ、ら、う、一、旦、ハ、良、人、に、別、れ、て、お、福、の
生、活、を、い、ま、ん、て、見、に、か、森、実、を、い、ま、ん、て、果、て
ハ、工、學、士、と、志、を、全、く、お、も、ん、と、い、か、お、手、か、も
い、ま、ん、と、い、ま、ん、と、の、良、人、に、戻、ら、ん、と、い、か、お、手、か、も
若、い、婦、人、が、嫁、い、た、お、い、ま、ん、と、い、か、お、手、か、も、い、ま、ん、と、
世、界、漫、遊、を、志、し、て、煩、悶、を、消、さん、と、い、

たといふの如く此や夜が終りてある。

此婦人固から其の素性を先白してゐるのを見ても、
幼弱として母の早もたれに死別し、父の身代限
をして、貧しい生活をする、金を大切なものと
まゐとの親念を早く起し、美顔があつたの
五流の歌舞家、嫁かんと心かけ、親位を年
る市長の婦人とするんと果すことが出来
うに保し、其人から其の資をゆてお南の教育
を受け、終に嫁した家は、お南の資を其の
へは曾所であつたが、後、子が無つたといふのが
此女の素性である。コンナ素性の婦人が、
醒期と離婚を企むといふ中、**強ち無**

ハるい預るも思ふ、チーダが可なり、何つてあるか、
思ふ、若し子があつたらう、どうであつたらうか
若し美顔が無つたらう、どうであつたらうか、
し母の手を、育ち彼生をえる、どう
であつたらうか、西洋婦人の事、**我**、
其の終が、婦人固から、**美化**
てある。離婚をもとめ、**獨**
我、**我**、
亦、**獨**
の、**日**
流の婦人の、**無**

別と多く出ることあり

五月十五日記

○無聊に乗して王维集を讀む、左の二首、至所
人と動かすものあり

別弟妹二首

あ妹日成長、変化眾將及人、已能持寶瑟
自解掩羅巾、念昔別時小、未知踈其親
今来始離恨、拭淚方殷勤
小弟更孩幼、归来不相認、曰后誰漸換、
見人猶未負、宛作越人語、殊甘水鄉食、
別北窓為難、淚盡有餘憶

他二三吟誦飽かす自詩あり

多負居依谷口、香木帶荒村、石路枉迴駕、
山家誰候門、漁舟膠凍浦、獵火燒寒原、
唯有白雲外、疎鐘少夜猿

新晴勉望

新晴原野曠、極目無氛埃、野門臨渡
頭、村樹連溪口、白水明田外、碧峰出
山後、晨月無闕人、傾家事南畝

晚年空知返舊林、松風吹帶解山月
照涼琴、君問窮通理、漁歌入浦深

○後書其境を異するんば其味亦同しからずた中
 後して何等感せざるも其間中 後して感することあ
 り、得意の時後して快とするも又其の時後して
 不快とするも亦同し、朝夕人の氣分同しからず也
 つて書味亦亦同し、○からざる也、同一の者と異
 とも境を因り只其縁也、今事と境に依
 りて其の異なるも、○得、後書八景といふ

一 羈旅

舟車

二 砕後

三 喪中

悲哀

四 獄宍

漏塔

五 陣營

所

六 病葺

七 毒院

僧房

八 津渡

別荘

外園

如若也

○(三) 旅中の沈黙の後、時ひま、無聊の者、瀕
 有い時である。シンシリ書物に就いて得るは時
 である。旅中より多くの園者を推し得るは
 ハまよもあるが、シンシリ書物に就いては、
 出来た、ハ、同伴が一つか二つを限るとして、移り
 気かしまいから、書物、書物、書物、書物、
 かん捲いてみるから、兎角に氣分が移つて、一巻
 を読了する内、他の方と手は掛けることが

免れぬ、讀むるも、其の躁急び、既味が出来まゝ、
旅中、汽車の中、船中、も、将に死後、
数時、免れず、と、数、時間、
か、甚、か、深、い。

三、酔後、精神、が、興奮、し、
と、
し、
者、
有、
て、
が、

の、
を、

三、
の、
者、
ハ、
痛、
に、
の、

四、

の罪や改法市犯るゝが、繋獄せん此場合をいふので
ある。固圉生活編居生活、二羈旅と云ふ點に於
て趣を同ふす、是れ家族此離れしお獨りあ
る點、~~此~~羈旅、羈旅、~~此~~憂憤の情の激
越である事、ことだ。無聊を慰するゝは讀書
を事とし、~~此~~徳好の核人とする云ひ得る。
~~此~~二、三、~~此~~讀書物を讀むは此時である。古人の
書物を讀んで得る所のあつても此時である。憤慨の
餘り古物を善用する例もあるが、静かな修養を積
み人格を磨くも此時、~~此~~少くも古來
編居中に書を著し、是が不朽の名著とするつてお
うとのが少くもこのことをよくも獄中の讀書

るも感慨を込めて身に浸するゝの無い。事
五陣營の後書は死法の間の後書である。勿論豫
丸兩射の間、この後書の餘地がある。或は長期川の籠
城、邊塞の駐衛、皆これの範圍に属し、危険の中
に伴ふるも讀書の餘地がある。澤びるゝ。多くの
場合兵書を讀みし軍械軍略の書を讀み、
境に臨み其専門の書を讀み且の存するゝを痛切
に感ずること、無い併し、~~此~~兵書軍籍に限
り、報國志君の思想を鼓舞するゝの、~~此~~歴
史あり人物傳あり、請觀遺言的の文篇もある。此等
の圖書は陣中の後人が最も味を感ずるゝも、武人
的修養は多く陣營の後書から来るゝといふべき

であるまい。

(六) 病辱の漢書、苦痛ある病と曰推う、荒く執三困
一此病の場合の例外があるが、否とさる病人の七長
く臥せしむるを得るは、病辱に於て、其の慰安とさるは、
消滅の具とさるは、唯此漢書あるのみ也、
物能系列の人の斯の場合もあらずんば、書物に親しむ
穢念かまひのむ、昔のから此病の人の病辱の中を樂
天地としを喜ぶもあらずある。病辱の中は消滅である、何
人七病人を妨げるものがある。病辱の中は、
耽溺以上
耽溺が出來たのである。病辱の中は、
多くの場合精神が沈滞して、サズセリテ、
つてのみから、漢書に、法を以て之を治すことと云、
十二

一、自然多量のがある。

(七) 僧院の一種消滅の要がある。佛像を拜し、
鏡を以て、誦経せしむる、この人から、
趣味がある、空宇のあり、
高僧の遠方、
院より、
く、
んを、
はず、
種、
(八) 林、
といふ、

ることや、製糖に於ける凡そ各地の別業
をいふのである。右の如く寛政の如き集分て後者を
たし、幼少の如くあらば、日と接史に於て
えん、廻交際と日没頭するよか、後書に親
しむ所より、たに地高より外より無い、或る邊に仿
し、作くを後史の如く、其の如く別荘と同日の秩也。
畠を別地に廻け、後史三昧に入ると、六日の秩也、連
續的に考物を後史に安か、あ、**小森**の時、**小森**
林方の若尾、信石、誰のし、も、喜ぶ、僧院生活
に似て、遊ん、即ち果也。
五月十七日記
○坪内道逸の古稀、ハ、未の存、昭和三年、ハ、存
道逸を紀念する為め、演劇の協力を

記す、しとの計畫、其の先の増進、**甲**
多く和し、去年、養老、をひらき、折、大、安
を内法し、余を其委員、推し、其、其、後
演劇の、の、あ、一、般、水、日、界、中、氣、振、ハ
す、其、休、に、あ、る、と、遷、引、ハ、高、い、昨、今、文、科
出身者、志、き、り、と、着、手、を、促、す、と、あ、り、打
捨、り、き、難、く、近、日、余、を、忘、き、り、も、各、校、南、高、
没、き、と、あ、り、特、に、坪、内、と、**海**、と、**海**、と、**海**、と、
各、校、南、高、も、加、り、内、議、略、々、決、し、り、不、た、の、如、
一、演、劇、協、力、と、す、す、こ、と
一、地、を、大、學、の、地、内、重、長、門、の、一、角、割、取、回、
童、に、附、る、所、に、建、設、の、事、

- 設計し大要の概内の案を其基礎として
河内時代のものを定形とする
- 約二萬九千五百圓(概三万圓)を以て
を要するとして
- 早大が書記することと廻り居る演劇
に關する人を書記人とすること
- 完成の上早大の定附することと、
も、こゑを一個獨立のものとして扱ひ
國音館の附屬とせしむる
- 此費の内、早大一萬圓、早大出
版部一萬圓、寄附の事
- 概由を以て速に豫集印税二萬圓の

寄附の事

- 概内の更々大久保の土地家屋を以て
業に投するに於て、寄附の申出あり
- 本月三十日委員令を附し書し

五月十七日記

○近年男女の關係の淺趨あり、殊に上海社會、又
ある社會を以て起る起る紙を以て
或、社會主義の二天を附するに、何より左の
記すは、その及むる人に、載する所、
今期は起る一端を以て、其の概
廣く人に未だ有也

五月十七日記

▲良家の子女を誘惑し、尾花ヶ崎に情死演習をなし、文名天下に馳せしものは森田草平なり、世深く咎めず、大學の先生として子弟を薫育しつゝあり。

▲預かつた姪を遠慮なく傷者にして、其の不埒を辨明した小説を書いて天下の同情を集めたるものに、島崎藤村あり、飯倉の聖人として世の渴仰する所となる。

▲糟糠の妻を堂より下し、あだし女と契りしものに先きには島村抱月近くは石原教授あり、抱月は身死して遺文尊んぜられ、教授は保田に生きゐて歌名甚だ高し。

▲他人の細君と肝膽相照し、遂に情死を遂ぐるに至つて、全集一萬部賣切れの隨喜を受けしものは有島武郎なり、迂濶に武郎を誹れば拳骨を喰ふとは恐ろし。

▲勿體なや祖師は紙衣の五十年とほくりつゝ、勿體なや子孫祇園で藝子買ふを演演する者に大谷旬佛あり、爲めに俳名四海に布き、半折一枚百圓とは勿體なや。

▲女房持たれにや管長やめる。肉が喰はれにやお師家は御免と云ひ、肉食妻帯、大衆に範を示す者に建長の菅原時保あり善男善女、却つて隨喜すること雲の如し。

▲五十過ぎての痴話狂ひ、作家的態度を失はず、唯だ彼女を観察するのみと辨じて、娘なす若き女に沈没せし者徳田秋聲あり、世の中は反つて其の研究心の深さに傾倒す。

▲姪らな若い女は秋聲の懐より抜け出して、同氣相求むる青年と湘南の別墅に同棲するに至つて、秋聲は「毒の花」と罵つて赫怒し、世人愈々老文士に同情す。

▲毒の花は復歸して老文士の懐中に入るに及んで、秋聲忽ち驢聲を發して之を迎へ、毒の花ならず藥の花だと廣告するに至るも、世人は其眞率に敬服す。

▲八百屋ち七は嬌名を後昆に傳ふるもの、人は其情を感むも、其奔放を咎めざるものなし、近頃其の追悼會といふもの知名の文士により舉行せらる、會場は東京市の自治會館なり追悼會は御勝手次第なり、市が之れが爲め其公設會館を會場として提供するも、何人も之を怪まざるなり。

▲其昔し稻舟女史と關係したる故を以て、社會的制裁を受け終生不遇で窮死した山田美妙齋は、泉下必ずや不公平を喝らすなるべし。

の汽車中の其聊を消さるゝは、西家橋本
 宮の逸事を描き、其後を北地、子玉とて
 洋行中の事を描き、支那の風味の人々の
 西家が西澤の事柄を觸れ、西澤の花書に觸
 れる観察が、自らも其味がある、自らも代
 々の洋行の事柄と思つて、同感がある、其
 際、西澤の画、毎に見る、其人、其未だ交
 際が無い。

内田の尾氏が未来派の書に七の動
 体が描かれてあることを論じ、日本人の
 の想像力の欠け、ことごとく云つて、其
 欠けの

かゝる先覺者のやまのけりしに僻見があるかと
遺域の思ふことでも、日有るより五六百年の
まへ、ゆらぐをえを試みたりしなり。亦
流物終る現にんは、神所車の轍の影、松
木を打振らぬの運動、まゐりてあつちを
ん、走らる脚、押へる手、まゐりてあつちを以
てかき試み、まゐりて思ふこと、移りてを
施し、此ことは、意もたふし、まゐりて現さ
んとし、此証をまゐりて思ふこと、日本のこころ
しに終るまゐりて思ふこと、得たと倣ひて
まゐりて決し、牽強の説と断言する事、出来
まゐりて、往年の又一、ホシ式が先珠から思ひつ
て、終る逆輸入とせんといふこと、しるす事

歐洲の寺院より、到る家天使の像があるを、そ
んが、来りて、羽が、侍へんてある。羽が、来りて、
と飛へぬと、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
空向るまゐりて、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
らへりて、日本の天女、煙衣の運動、は、まゐりて、
巧み、まゐりて、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
花の、おもしろい、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
ん、まゐりて、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
まゐりて、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
と、非天才の、まゐりて、まゐりて、まゐりて、
と、非天才の、まゐりて、まゐりて、まゐりて、

和菓だうの内れ 魚を釣る閑人の多きに異
様な感をもえ候 古いおえだの絵は逸人の回
るも多きことを思ひ合はせらん 魚を釣る候
ちぬのせがれが文のはるくとどきて来しる

おえだの絵

廣重の木おりの巻とおえだの古い絵の
多くと似たりとも思し

和菓だの古い絵の回にうつろへる
八月の室八月の海

この畫高の二階こじカソは信んかある

私にこの二階位いと長く人が現物や西画
壇の才一人者を以て自惚れに許してあるにカソ
多し人の多くと少いた時 一程異様の感しる打
たえた。ガリヤの心家の畫高の二
階の画をかいと長るといふ世間いどう思
ふてあらう。私にこころした自由闊達な世
界を狭する日本の社名向批判のまこと
持て来つる。意像もつかぬことし考へん
のひある。

日本に在つる主体派の心を見た時より決して
そのまこと許容することが出来らるるもの

らぬ。獨逸びえんをえり刹那のその企畫が必
然的のものに任はるる(田)動が(屋)を(る)くこと
と、思ふべし。

科をと思ひますアノ伯林の環境が主体派を醸成
するにまことと南流の傳統あり、思ふ私の
この直感が漢くすば、主体派ハ必ず獨逸
と北洋派と成長するにあらざる。

近き將來に七一(大)天才の出る事あるに、是ハ
西史にあらざると思ふ。私ハ決して豫言者振はら
ざる。否、或ハ既に私等の目前に此(大)天才が動
きつ、あるにあらざるか、私ハ何れかと思ふ。

とめたることを思ふ。

露西亞を包むアノ大いなる波をゆする時、
四土が東洋に接續せしは、ハルシる。吾等と
多式多の共通も、晴而を握ることが出来る。
天才ハ狂人と相隣するものあることハ、
陳腐なものである。白人の仕事が常流を
行くと現勢と根柢の仕事、依つて異等
の力を求め得べきことハ、私等の求むる
大ハ決して一のつぎ二、二のつぎ三を
可き常流的のものに、是れによつて求
得するべきことハ、セザンヌの業績七
是ハ常流の集結に外なることである。

嘗て神祕の國ひあり、紅毛の國ひあり、元大國
支那に對する感念ハ、後して、西國に及ぼす
ことか、此れである。

新嘉坡の淺きく感せえは支那人が香港に入ると
及んで何んといふ主流な存在のあり。……私
ハ手を挙げた狂呼した。支那だー何んといふ大きな
自然の姿のあり。奔流湯鉄の近代文明の
織細るる人工を施さん。英佛の自然を「慈柔の
比眼」の比較する。ぬねの大きな姿の
底へと流るる沈痛な新しけし。私ハ又石ニ特異
の興味を持つ。國民性をも考へて見た。魄

中折を合ふといふ所々多くの石に漢字の感徳を
思ひ、森然と木杪の姿に包容せえは、デリケート
な肌理をもとを聯想した。ある。まこと、石の
大きな汽船や甲艦の一隻の我々の力強い
振のまじく、影々たる海の色を見ぬ。……何んといふ
自分の皮肉のあり。……海がと鈍刀の
お逢ひのあり。……まゑを見得ることの痛々術家
として、思ふを感せぬわけのあり。……

私が曾て南京の石を泊り合せて、某洋画家
から、日本畫の氣味を、見せあげば、……
……「洋畫の結構

いよいよ実物さくあんにん画か出来るのむすかしく
なると。尚時偶発的に出た言葉もあるが後
より考へることは、たゞ多量の暗示性をお
つとめることを知る。

欧州の四境から接して居る関係から各回より
傑出した人物が出現する。各方面のより、他
他國に向つて競争の激しい世の事象を仕立て
り、其の國家の宣傳する結果、右の如くお
して其の實情の下の風が無いかも。これら
ろくへ行つてから氣附いたことである。決して
あことの出来は、四つに美しき。日本のことと

せくし。少し細巻の詞をも、頭を擡げかける
と直に打ちこわそうとして、懸念、ヶ々をつける
み波々として、族相坊々、外廻りまわして居る
暗黒面や内部生活のあつたことを無いかも。いいやに、
低劣な陰翳をつけて言觸る。四民七多く
るへ。幸後の方々へも、大新巻の記名が、小感
情の爲め、平氣なむらつを著し、社人組織が
悪い。

○私心新法を改進黨の萌芽を培養しつゝある
此其時大田結周といふ風名あり自由改進黨を
をこぼさんとして後藤静伯が大石正三を伴ひ新法
を来此時私に極力せん交ありて後藤は何を得
ず所を以て去つたのみ、今更らるゝに凡そ私の成
びあり終に出来損へば大田結周に投するのハ
全く不利であるが、多んが須藤南翠の革命者
かゝるであるといふくの初耳である後藤を招き
て私が起つて及ぶ演説をやつてみる固也
といふは、殊であるが、其の漢りむ其席に
私に生るゝに私のみならず、同志、機も入る
と云ふ、此の爲、寧ろ私共の苦心の事と云ふ

○其れは、朝論の難あり亦夏洞の事もある、
武田の面々を愛れ、其の愛する毎、別を多と
者いれと入へる、河内城壁に赤い人の名を
かある、情婦はいひのといふが、此の
難かあるの、後藤静伯との親といふ、
かある、亦行つた時、赤家の宿史とい
て、こゝに一月を泊つた、関西の随筆に
の、難を不意と漢化してある。
大宰春其の難が、あつた、春其の支
那の天子が、宿史を御する、宿史といふ
て支那人の噴飯する
○今更らるゝの、此の、此の、漢割

協約館の構造に就ては、この室を採用する
 ことは、さうして、さうして、さうして、さうして、
 : 深い刻場の廻り、基いた、よ、か左右ある異が
 張つて、其の両側、中間に、さうして、さうして、
 を玄關に見え、さうして、さうして、さうして、
 の法隆寺、同様の異物を始め、陣列、
 室や、法隆寺、室や、さうして、さうして、
 向心、協約館が出来、か、さうして、さうして、
 室を、尊敬、さうして、さうして、さうして、
 道進、凡の、法味、さうして、さうして、
 へ、さうして、さうして、さうして、さうして、
 も、さうして、さうして、さうして、さうして、

四十五年の 舊を懐く

市島謙吉

嚴田城は、四十五年の戦い、
 戦を、法隆寺、室や、さうして、
 室や、法隆寺、室や、さうして、
 向心、協約館が出来、か、
 室を、尊敬、さうして、
 道進、凡の、法味、さうして、
 へ、さうして、さうして、
 も、さうして、さうして、
 協約館の構造に就ては、この室を採用する
 ことは、さうして、さうして、さうして、さうして、
 : 深い刻場の廻り、基いた、よ、か左右ある異が
 張つて、其の両側、中間に、さうして、さうして、
 を玄關に見え、さうして、さうして、さうして、
 の法隆寺、同様の異物を始め、陣列、
 室や、法隆寺、室や、さうして、さうして、
 向心、協約館が出来、か、さうして、さうして、
 室を、尊敬、さうして、さうして、さうして、
 道進、凡の、法味、さうして、さうして、
 へ、さうして、さうして、さうして、さうして、
 も、さうして、さうして、さうして、さうして、

るが、私にも責任があると中心
 性たたらざるを得ぬ。私が高田
 新一郎に赴く時、亡友田中新一郎
 (君之助)が私に寄せた詩があ
 る、それは久しい間私の手元
 なかつたのを、今度高田新一郎の
 遺失柱に頼んで當時の新一郎から寫
 して貰つたが、その詩は左の如
 きである

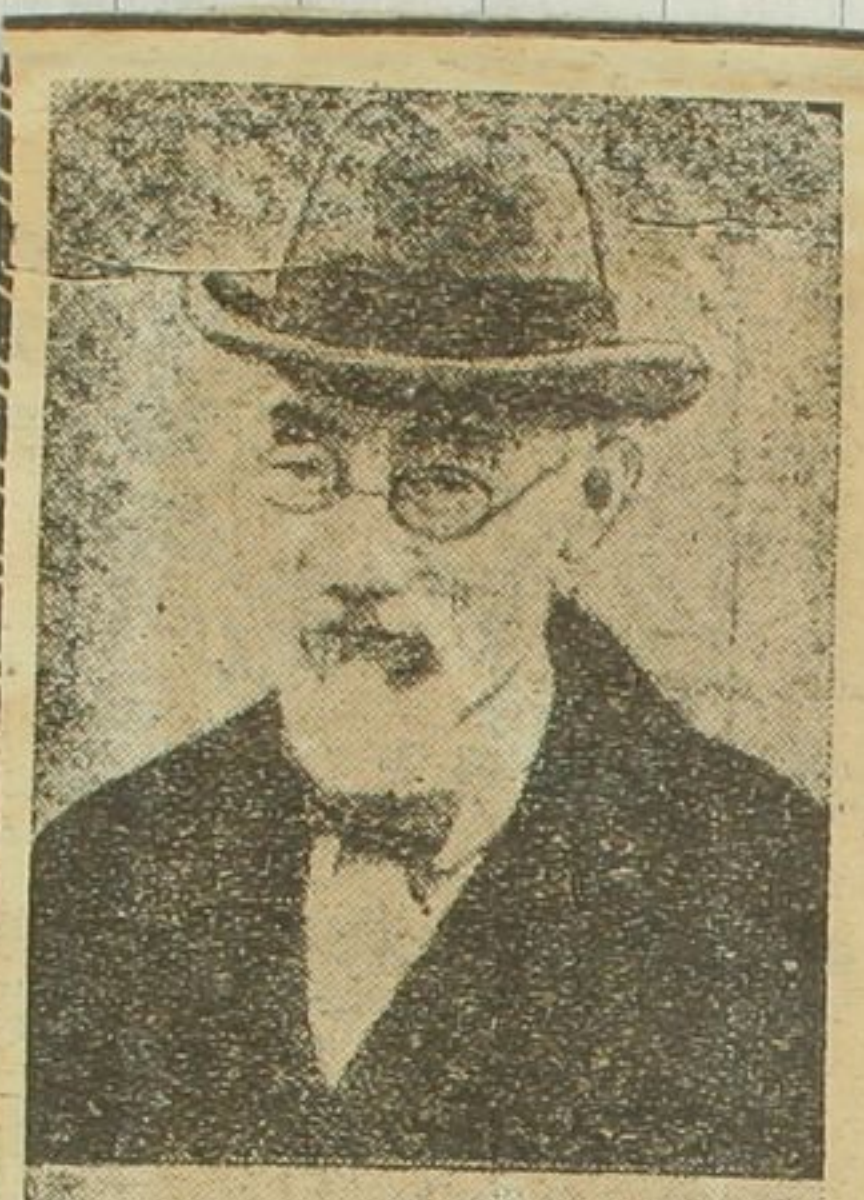
浜市島子謙之高田
 子謙大面氣味、決然振袖將
 遠白、酒三杯歌三疊、折柳其
 奈何別情、知君野性不羈
 馬龍、屈身把酒、知君久抱
 屠龍劍、彈弓斷路、射狼與
 虎兒、同窓、昔讀、西文、才子群
 中、推君、丈夫、畢竟、瓦全
 喬、爲、清明、策、奇、勳、長、風、萬、里、吹
 短、髮、高、歌、一曲、氣、貫、勃、夫、矣
 明朝、官、道、春、風、却、却、風、潑、昂、人
 同、年、輩、の、同、窓、の、作、であるから、
 謝、氣、満、ち、である。私の敢て當ら
 ない、謝、辭、もあるが、當時の意氣は
 よく、描、して、あつて、四、五、年、振、り
 で、讀、んで、見、ると、若、者、時、代、の、事、が
 思、ひ、出、ら、れ、て、今、昔、の、感、に、堪、へ、ぬ。
 此、同、窓、は、春、日、山、に、ち、なん、で、私、に
 春、城、の、號、を、與、へ、た、人、であるが、そ
 の、人、實、を、易、へ、て、既、に、十、年、餘、にも、な
 る、ので、こ、ん、な、場、合、に、消、遣、する、と

感、傷、無、き、である。
 四、五、年、前、社、義、を、興、に、した、人、は
 社、義、を、興、成、し、て、計、謀、早、く、遂、げ、
 僅、に、存、する、のは、、鐵、屋、に、苦、楚、を、共
 に、した、竹、村、貞、貞、氏、ある、のみ、である
 社、外、の、知、人、では、石、知、藏、氏、を、近、く
 愛、ひ、久、し、く、音、信、を、絶、つ、て、は、あ、る
 が、第、一、郎、氏、が、健、在、で、あり、溥、曹
 界、に、終、始、した、黒、田、英、雄、氏、が、拙、著
 『藤、藏、山、陽』、に、つ、いて、幾、十、年、振、り

に、京、都、から、書、狀、を、寄、ら、れた、ので
 その、健、在、を、知、つ、た、位、で、他、の、多、く
 の、知、人、は、皆、な、故、人、とな、つ、て、あ、る。
 高、田、事、件、で、被、害、人、とな、つ、た、自、由、系
 の、人、々、は、四、十、餘、人、も、あ、つ、た、や、う、に
 思、ふ、が、こ、れ、將、今、日、存、在、する、人、は
 在、る、か、無、し、であ、ら、う。今、四、五、年
 前、の、習、を、語、ら、ん、と、し、て、も、私、は、幾、ん
 ど、その、手、を、捜、し、得、ない、ほど、に、多
 く、の、形、跡、は、過、ぎ、去、つ、た。
 此、四、五、年、來、高、田、の、變、遷、も、顯著
 なる、もの、がある。信、越、鐵、道、が、完、成
 して、下、は、新、潟、に、接、し、上、は、東、京、に、達
 した、のみ、で、なく、越、中、越、前、加、賀
 を、經、て、京、都、にも、通、じ、發、通、の、開、け
 た、とは、非、常、の、もの、で、昔、上、杉、鐵、道、假

が、一、生、の、心、血、を、傾、け、上、國、に、達、せ、ん
 と、し、て、出、來、な、かつ、た、と、が、今、は、實、現
 され、たり、壯、大、なる、兵、隊、が、置、か、れ、て
 國、家、軍、艦、の、處、とな、つ、た、などは、最も
 大、なる、變、遷、で、こ、れ、に、伴、ひ、各、方、面
 に、變、化、發、展、の、あ、つ、た、と、はい、ふ、ま、で
 も、ない、が、高、田、新一、郎、は、櫻、花、の
 内、から、辛、酸、を、嘗、て、生、育、した、甲、斐、が
 あ、つ、て、爾、來、健、全、なる、發、達、を、遂、げ
 室、の、中、に、育、つ、た、もの、とは、異、つ、て、
 その、剛、健、の、資、質、は、如何、なる、艱、難、に
 も、打、勝、つ、四、五、年、の、戰、を、重、ね、一
 萬、四、千、餘、號、を、積、ん、で、も、な、ほ、若、々
 と、し、て、前、途、頗、る、多、彩、である。私、
 が、四、五、年、前、に、交、つ、た、人、々、は、九、分
 が、九、厘、まで、故、人、とな、つ、た、が、ひと、り
 高、田、新一、郎、な、み、友、人、は、益、々、元、氣、旺
 盛、であ、つ、て、此、友、人、だ、け、は、毎、日、遇
 は、ぬ、日、の、無、い、のを、私、は、此、上、な
 い、喜、び、と、し、て、此、記、念、の、場、合、特、に
 その、前、途、を、祝、福、せ、ざる、を得、ない。

か、一、向、く、外、國、を、征、つ、て
 め、ろ、ろ、一、証、も、あ、る、こ、と



Phot. Kessler
 General Baron Tanaka,
 Führer der japanischen Seemilitär-Partei,
 übernahm die Kabinettsbildung.

これが田中大將か
 四月二十日のモルゲンポスト紙が政友内閣の成立を報じ此寫眞
 を掲げた。説明に曰く「内閣組織を引受けた政友會の親玉、男
 爵、田中將軍」この寫眞は田中大將でせうか獨乙でさへも將軍
 は一世紀前の代物。そんな寫眞の持合せがない。寫眞を借用さ
 れた田中館愛橋博士こそいゝ迷惑でせう(ペルリンにて、興口
 文次郎報)

か、出、來、る、あ、ら、う。

○早稲の思ひ報、連揚の余か思ひ出さるゝの内
 へら、心も早稲の大志を伴ふ五名物と題
 する一稿を定めさすべく、考ああ中一の大概も

物質的方面を早稲田大学の譲りとするべきこと
ハ何んぞあらう!

第一に奉くべきは恩賜館にありぬべきこと
第二に其の名恩賜記念館が自由なるこ
とを以て天皇を以て学校の犠牲の成績を
を以てせん保つる由外を特大にめぐる
こととお思ふを以て三つある所賜
の盛るを以て永久に記念するに遠くより
である。皇室をも下賜金のあり、陛下を
珍しくするが、一私子に其種中對し恩
賜のあつたの、餘り例がある、少くも本校
が聖恩に浴し比初めである。其未だ前に福

洋論を以て物に比、まんと度、度義塾の用
に供したることあるが、まんとおのりから別で
ある。政府からハ厄い板を受けおれ、其
頃、白皇宮から此恩賜のあつた、其
始の一般の位を傳へることあるつた。
校運の大いなる、此聖恩のお
蔭である。曾て先帝、東宮に在る
時、台座の光栄を得た、まんと
此の御下物の縁から、現に恩賜
館の貴賓室、其時、先帝の御
休息の所、既、此の御時間を延長
て後、御休息があつた。尚、其時、御手控

古くすふしに三尺許りの月桂樹に今に石柵を設
 するものあり。繁葉茂しとある。此館に敢て翰墨
 の美を極めしと在太のものとハ謂ハぬか。ゆ
 久に聖恩の渾身もきを後るものハ此館のあり
 乙、私考に類例の無いものあり。

(三) 次々挙げへべきハ大隈充英の舊邸宅にある。ま
 校の生名の恩人であり総長であり故人の第宅
 が、其の薨逝の後早稲田大学に寄附せられた
 といふ何なる美しいことであらう。此の邸宅を
 道を隔てて^後川舟の外形はあからまじい地懐か
 し同様である。故恩人を記念するまことに優る

ともが何があらうか、此の第宅目の各角に、候在世
 の時月の^の花^の作、詞度七裝飾もそつくり其
 依である。外園に、各流の住宅を其供に長く保
 存する例があるが、日本は^い七^いく^らか其
 例が無いものもあるが、塚本深い学校に寄附
 せん、ま校がまを記念物として、所有するとい
 ふ例、幾んど変化するもの、まも七長河の七寄附
 乙七庭接図の七寄附、苟もまもまも七ま入る
 と忽ち老候を遺徳し得るやう又なるをみる
 まこに、記念の意味がある、偉なる敷敷の地、第
 宅中屋の七故人を認ぶ料とするものがあるが、此の
 第宅は其のままなるものである。天下才の人世

畏り偉人と言ひまゝに人々を驚かすに似て、
模のよみである。四方からいふと、此の第宅に紀念
の碑をばたかひ、大なる大なる光彩を添へる
よみである。此の第宅よみ、先侯の長い生涯の
歴史かつき纏つてゐる。先侯が國の爲めに努力
し、策源地に即ち此處である。先侯が世界の
人と接見し、此の地をこゝろとす。先侯が世界の大
に参りし、獨りこゝに宣戰の旗をたて、此の第宅
にあり、此の家は、此の歴史の重大事件に關す
る内閣會議の開かれたる處である。乃ち日本の歴
史的紀念物にもある。更なる味の方
面から見ると、此の第宅の廣大なる庭園は

都下、松平有数の名園にあり、園治家の
常、流石である。不のよみである。七と此の庭園は、
高松の藩主松平家、下屋敷にあり、此の
地、其の直系の松平頼壽伯が早稲田のちの生
身であるといふ。其の縁因である。松平家所
有の時も庭園は東海も、五十三次、形つた。此が
ある。此の有数はあり、此の地は、先侯の手による。
此の庭園を改定して、先侯の手にする。南高系統
の庭園を試み、作らせ、此の地は、此の庭園
である。此の地は、此の庭園の歴史に就く。此の

逸す可きもの正事をも用ひてよである。一木一石皆
な候の玩味から考へしと豆かんのよめひあるこ
とを考へくると、真に貴重品の記念物と云へばこ
ゝを得ぬ。河内のその校むも趣味ある大庭園
を有するよめひも或んと無い。あかし能くあべ
くハミの校む敷束も遠道掛付徳を致すも清楚
な園林が其の境内にありいよめひある。幼校を
暢神怡目の坊名ハひとり寺院の亦有じある
べき花かある。先候の四第宅の室附ハ此意
味に於てハ云へし曰大なる惠福ひある。

③ 故松長を記念するよめひ 侯の旧邸宅の一部

運采るよめひある。記念大津堂ハ此よめひ竣工
の道程もあるが、こゝも早稲田の滝リとして
挙げハべきよめひある。こゝも其規模に於てハ
其美観に於て都下有数の大集合館である。
大多数の人を令し得る規模か、こゝもこゝんが
都下第一のよめひである。其よめひハ何故か多数を
令する集合館かある。大坂のよめひハ公舎もあつた
名をなすよめひも四枚館かある。大坂のよめひハ却つて其
よめひハいよめひ無いのよめひも多しである。
其四の四枚館ハ多数の人の集まる所である
が、こゝを神楽場と云ふと又其よめひハ餘り不便
である。其早稲田大のよめひハ其よめひハ二萬の大衆

を有らざるを、まを一所に合し得しとする家を
得るいふか、其半敷すも、~~會~~収容する所のま
の、久しく不便と爲す事不むあつた。其校の中庭
にテントを張り大隈侯の銅像の石壇を、~~境~~
に充てたことも、長い間の事が卒業生紀念會
或る校史、特~~意~~筆を盡すべき大令が、爰に開
かんたこと、一種醜味あることとせらあつた。其
を云くハ、さういふ不便のことであつた。故紙の
此のテント張を、毎大令が、不しいと云ひ
九に、あかし、其校の侯の生前、こんを建てる大の資
力が無つた。侯を、ちと記念するたえ、其侯の位
の地、大隈侯を、築くのに、侯の遺志を満すよ

じあつた。其義あるに、意せある。こんが多数の有
志のまを、捨~~て~~、まを建てることといふは、善し、其侯の
本意、まをよむであらう。唯、此侯も、此の建
築を一見、ちしめ、りつたことが、遺憾ひある。
此講堂、~~も~~大隈侯を、支かうもの、
とも、遺憾ひあるが、侯の、~~位~~、地、~~に~~、徹、~~て~~、
いへ、まを、~~に~~、~~と~~、思、~~ひ~~、此の講堂の、
模、~~は~~、四千の席がある、詰め、~~ん~~、五千の、~~令~~、~~衆~~、~~を~~、~~優~~
に、~~充~~、~~て~~、~~得~~、~~る~~、~~の~~、~~を~~、~~ま~~、~~を~~、~~二~~、~~千~~、~~の~~、~~席~~、~~を~~、~~充~~、
た、~~る~~、~~舞~~、~~臺~~、~~を~~、~~充~~、~~た~~、~~る~~、~~か~~、~~も~~、~~演~~、~~劇~~、~~音~~、~~楽~~、~~の~~、~~令~~、~~休~~、
も、~~得~~、~~る~~、~~の~~、~~を~~、~~ま~~、~~を~~、~~一~~、~~角~~、~~の~~、~~室~~、~~を~~、~~充~~、~~た~~、~~る~~、~~の~~、~~方~~、~~形~~、
高塔が、~~建~~、~~ち~~、~~し~~、~~た~~、~~上~~、~~部~~、~~に~~、~~時~~、~~計~~、~~が~~、~~充~~、~~た~~

九、事業の時は報せざるも其の時間毎に其の全
 なる先：御方とこにたつてある。此角塔の中を成
 個の音があつて、大隈急便の遺物や文書と永久
 に保存する紀念堂である。やがて工を竣つて街路
 に沿ふ塙壁が撤せられ、其の一側をあつた時
 は、塔の所のあつた人：痛快の感と出づるであ
 り、真の早稲田の偉観を感ずる。此の塔
 せむである。追々、校用を之れを供する。大
 衆の集合する之れを奨励することゝする。

四、早稲田の一名物と見る。この運動競技

である。グラウンドが学校の境内にあることが他の
 学校に無いことである。早稲田の地形
 がよく其上に緑色のスタンドがある。光午の
 人の坐席がある。野球のある都府満都府
 の観衆を考へ付け、田舎のさういふ城
 二立錐の地をきまるとする。早稲田の野球
 の競技は優れてゐるからである。グラウンド
 が観衆の都合のよい所であるからである。愛
 する野球の記録と特著である。有名な競技
 が行はれてゐる。外圃の草(手)の草(手)ハ勿論
 内地の大競技は、此のグラウンドで行は
 れてゐる。運動界に壇場を許さなくては

グラウンドがある。近時あるの相撲か其株を
 野練競技に奪えつてある傾向がある。競技界
 にはあるが、早稲田の盛衰があまりつた。あ
 の、事実である。早稲田の競技が、あるが、巧
 んであるが、斯るもの、周知の事であるから
 多く語るを要せぬ。其の優勝の賞として
 早稲田の得たカップや旗は既に百に無人と
 してある。此等、比する恩物、館内の貴重品を
 二重のんであるが、純銀を以て心え、内外
 大十のカップは、むしろ、欄を陳列せん。七
 事、中、四、提、改、名、所、を、題、する
 もある。外、四、の、諸、大、学、を、字、を、以、て、の、も、あ

つて、雄然、目を、本、懐、し、恩、物、館、内、の、大
 壯、観、の、流、石、本、早、稲、田、の、名、物、と、し、て、お、お
 べき、もの、か、ある。

(五) 早稲田の名物として更らるべく、へき、の、新、道
 の、回、者、館、に、ある、こ、ん、と、先、帝、の、大、典、を、記念
 する、為、め、の、屋、敷、を、多、く、費、を、投、入、し、て、建、設
 し、た、もの、である。早稲田校の正門を、入ると左
 側、に、山、魏、然、雄、姿、を、現、し、て、ある、もの、か、あ
 り、ある。設計は早稲田工、の、専、門、家、の
 泉、智、を、集、め、て、成、り、た、もの、か、あ、り、西、洋、式、に、東、洋
 趣、味、を、混、和、し、た、もの、か、あ、り、内、外、の、装、飾、は、多、く

グロウプが用ひてあるのは、新造の時から
 雅緻な
 がある、追々鑄かきすんば茲に其素古の板を
 添ふる。此館の特色は、大正附属の圖書部で
 あるだけ、研究室が備つてゐる、尚ほ古庫
 内、研究者の居るは、席が設けられてゐる。彼
 の中樞は、読書室であるが、よく特色と志す、天
 井が幾巻的、まゝのこと、今得るや大に遠く、中
 心ある圖書部の読書室は、此館に二歩譲ると
 言ふところがある、天井が高く、随つて
 日七、八の爲め、光線がよく通つて、おのゝ
 地かよい。玄関は、此館の全体を代表する、その
 心も、おのゝこゝろ、その心、面々描かれ

田宮直徑二間半の大書画、現代画、其の大
 家、下打観山、大観の念仏、星雲の内よ
 リ太陽の昇る、圓い、平野、東條之んを、
 の圓とまゝ、その、文野を表象した、
 び、おのゝ、
 間半の画を一枚の紙に収めた、紙に、
 七、八、
 い、
 北大、
 館の、
 ち、
 ある、

へてゐる。書庫ハ六十萬冊を納める容積があつて現在蔵書の方約四十萬冊ある。利唐書内ハ狭路を差けるにあらうが、實ハ今の館ハ他日擴張を期してゐる。今の規模より更に二三合の二を加へる日が完成の時である。其時ハ書庫も擴張せん。式多孫六室を更に大いに加ふるにあらう。又他のものもあつて現在の蔵書も東洋屈指のものであることハ言ふまでもあらう。

書庫内に納まつてゐる四十萬冊の内外の圖書の内より貴重のものかやうなものは、其の作曲を述べた核心ハ別に求めぬべし。せんか、今の律、え、地、鼓の

誇りとするもの二三の古書も取り上げておきんとす。其の圖書は曰く六朝書を皇侃禮記義疏曰く鳥鈔本玉篇曰く日本古代文書十教通、此の三書ハ圖書に値し、若くハ圖書に値さざれば天下稀覯のものである。官私の圖書は致致難ハヤからうあるといふことゝ、このものを存してゐる所の早稲田の外に無い、とりて皆田中光顯伯の寄贈に係るといふのである。皇侃の禮記の義疏ハ法隆寺の舊蔵に、卷末に光敏皇太后の御印と傳くとある。内家私印の印記があり、多分皇太后が寺に納められたものと案ずる。

くる、この本四支那と早く世供にせよ、隋
書に傳ふる其の書目を存する、過きぬ此の供
書を何人が字したるも、先代の皇后の御手記
である、その文も貴重なるものである、此書
六朝代の著者、皇侃の言足、鄭灼の伝記
も手記とせん、且つ鄭灼の増注があるから、珍貴
が一層加へるのがある、國寶たるべき權威のあ
るの、いふまでもない、舊鈔本玉篇、顧野王
の編、これよむ、こん亦支那に供してある、日本は
幸に高山寺や伊勢の神宮、其他、現藏が傳
つてあり、四五禪の空本が流布、改定とせん、
あるが、早稲田の、高山寺舊鈔本、抄が、抄が

十二

最も貴重なる、此の現藏本の冠、日名とせん、
ある、これの、六朝古本が、前の、抄
よ、ふる、卷子本とせん、無、冷、四
變と推す、き、よ、あ、る、日、本、上、代、の、古、文
書、天、平、の、大、同、の、遺、簡、は、は、る
歴史の考証として貴重なるものである、此、行、の
文書、所、在、教、布、し、て、あ、る、が、流、布、に、田、中、伯、が
丹、波、を、以、龍、を、選、擇、し、て、文、と、し、て、古、文
書の華と稱し得ることである、
以上三書、何、れ、の、同、書、館、七、美、次、也、所、の、と、の
早稲田の、海、の、と、見、す、べ、き、と、り、也

五月林内録

○昨日久方振、神田の志願二三とゆふを荒平の田舎
を燐の花者全部を奪ふんと決して、未燐者癖
を奪ふる能はせり

神田倉平舊蔵者より獲得するもの

古事談

六冊

丹波昔者をもこ余北甚者中
このを寓目毎と燐ひ入る。此者其
例：従ひ燐ひ入る。此者坊分：出
こと甚稀

十二人いぬ

二冊

寛文十年收 繪入 美濃紙大の
をよる 汚るるき自をこお伽物

語の古るきことあり、古代物語の
自本今い候ありし、殊、正徳に
関するもの、時代寛文とありと
稀

産物証書

一冊

この証書の出候るる世に流布せ
す初めは寛文のころより、巻末の叙
を記す、嘗て西田を有本
を借り来り、其の元火の以る或は
亡びんことを再受ひ、同人と人
融金をとる、田中親美に

復た志を必ししむる教録を記
し始めて成る。此帖は北死の要部
を収めたる、よきもの、其の一斑を記
す。是より、古紙研究に役立つもの
あり、僅くは日記に配つるもの、
ある(る)ずと云く、心づめて稽考
のものとす。

修学院行幸記

三冊

文政七年の令二冊、同九年の令二冊
東本願寺藏書(園林文庫の花
記あり)の字を也。余此園と未だ見
ず、見入行く折の集り、七と傳ふ

此書刊本にあり

龍谷庵河内道之記

一冊

大の中龍公美の和文紀行より
余の家此人に舊あり、世に海におもつ
て此人、文をよみ、此書此人に在つ
て、其移とす、是より、余も入るもの
の旨味あり、記中多く四歌を
収め、その名の和歌、如く思ふ
る也

○貴重の圖書は、外四巻の貸す可らざるか、友人林
蒼樹が獨り、其の持込、今も出し、其の持

荒干ハズしく戻り来と云、日利産返(返)を得たは
と約念し多程さう二十年後を待た漸や戻り来ん
り、他の方面より出たはも日換らう、大抵か起つた
る為めにも依んど、往々船の沈没を測らんて、火
難もて從來失はれたるセある、心すへきことらう、折
し、愛んとの流の初年、奥地利場、現今の御日
本も、店名古名の純金のレヤチを出品し
た、いよゝく知らぬも、さうさ、美らう、が、同様の、上
野の大佛を、張り子で摸和を、し、出し、つ、と、
初め、さ、さ、事、実、さ、う、此の、換、佛、ハ、先、方、を、さ、
二、達、し、え、ん、組、之、中、火、災、に、か、り、出、る、陳、出、来
たり、し、由、あ、る、者、の、日、誌、に、あ、る、と、林、荒、村、語、る、

此と今迄の席、大島富夫の、其の先人、
の獄中、自害したる南村紀行と、著したる小菊
紙三冊の本を出して、茶へる、こゝに、甚、以、外、著、者、未
み、自、外、ら、其、中、の、新、筆、の、経、路、を、記、憶
し、呼、び、起、し、録、し、る、也、巻、尾、に、傍、語、一
枚、あり、富、士、大、守、こ、ん、を、公、刊、せ、ん、こ、と、を、
余、に、因、り、余、維、新、著、者、に、納、め、し、と、勸、む、
○石川千代松、博士、と、記、し、生、物、学、的、の、男、女、の
性、の、事、を、や、り、ま、さ、し、る、中、に、細、胞、の、事、に、涉、り、不、思
儀、の、もの、父、母、の、法、を、体、と、唱、へ、る、細、胞、ハ、必、ず、同
数、に、傳、り、あ、る、よ、う、に、か、ら、傳、り、子、女、の、腹、に、傳、り、よ
う、に、い、ふ、ハ、嘘、で、身、体、は、皮、膚、父、母、に、受、け、し、よ

のか今更の事定むある。唯は何れと男子か生ん何
 不。女子か生んか。就ては古来種々の説もあ
 りと来れ。種統か無いか。此は古来種々の説もあ
 の説も体かある。多んハセツクス、クロムリーム
 と名つけえてある。従来動物学者ハこんと
 氣つかうと云ふ。此の浮き体か有性を
 分つと云ふと云はんとあるが、志か。まじい。確
 ち。まじい。ホルモンといふ液体のこゝろが、有性
 を分つと幫助をさすといふ。是も又もある
 尚研究やと云ふ。

○五月廿七の教養本郷文の堂に於て三四の印
 を得

此印自用ニ定ム



大洲居士 考古香刻 長文 題祝



陶印



秋月古香の為
 此印は古香の為

文云
 三夜影三夏月
 十里秋陰百行舟



真山心

伊原の八
 野田半谷心
 遇所つ人

同日購入の圖書左の如し

一 四朝詩別裁集

十二冊

原榻本跡の洋本巻首に先福堂の集を載す世に流布本多く此集と刻す

五十五冊

一 素問玄機原病式例

一冊

河間劉完素守真述

元和二年丙辰

元六條開板

活字本也

一 神代歌式目

一冊

此書の漢文の洋注あり刊年と刻さざるも寛永頃のものと思ふ式目中の一異本也 書入のころ古時代也

一 菘翁心齋延壽帖 肉書

一帖

呉名菘翁晩年の書也肉筆の奇幅を切つて書幅とす字のよ、唐廬山の題詞あり装潢甚佳 懐古備へる價二十五圓

一 寺島長翁日記 自筆

一冊

林有左衛門の山振日記上下二巻也

お月の日記一巻を合はせつゝ、おお月の日記を後後受取の記さるゝ一人福川画水の序を載す、自筆也

古銭箋

二枚

赤古樓狩谷極前のお追遠のたろ日記
物品を陳列し、拓本を心のつゝ願ふに
つゝの、奉書二枚摺りて屏紙尾に
論語あり終り

嘉永改元八月

在美巻謹決

とあり

一 板(外帖)

一帖

中島枕隠の墨帖也、社中の詩を
録するの咏牡丹詩十二首を録
す、枕尾小井、後上九山、詩人共
策の跋あり、家存日本法帖の
内、加へて可也

所蔵人等

一 吟歩記

一冊

寛永二年 鈴木三者江戶を以て里
後く物産の記さるゝ巻中詩を多々
あり、此人僧とおぼし、其未だ

其係を詳うする所ならず、卷末の後注
ニ云く

寶永丁亥霜月初三書於初瀬三
徳宿 北紙散人 鈴木三者

一 糸印鈕譜

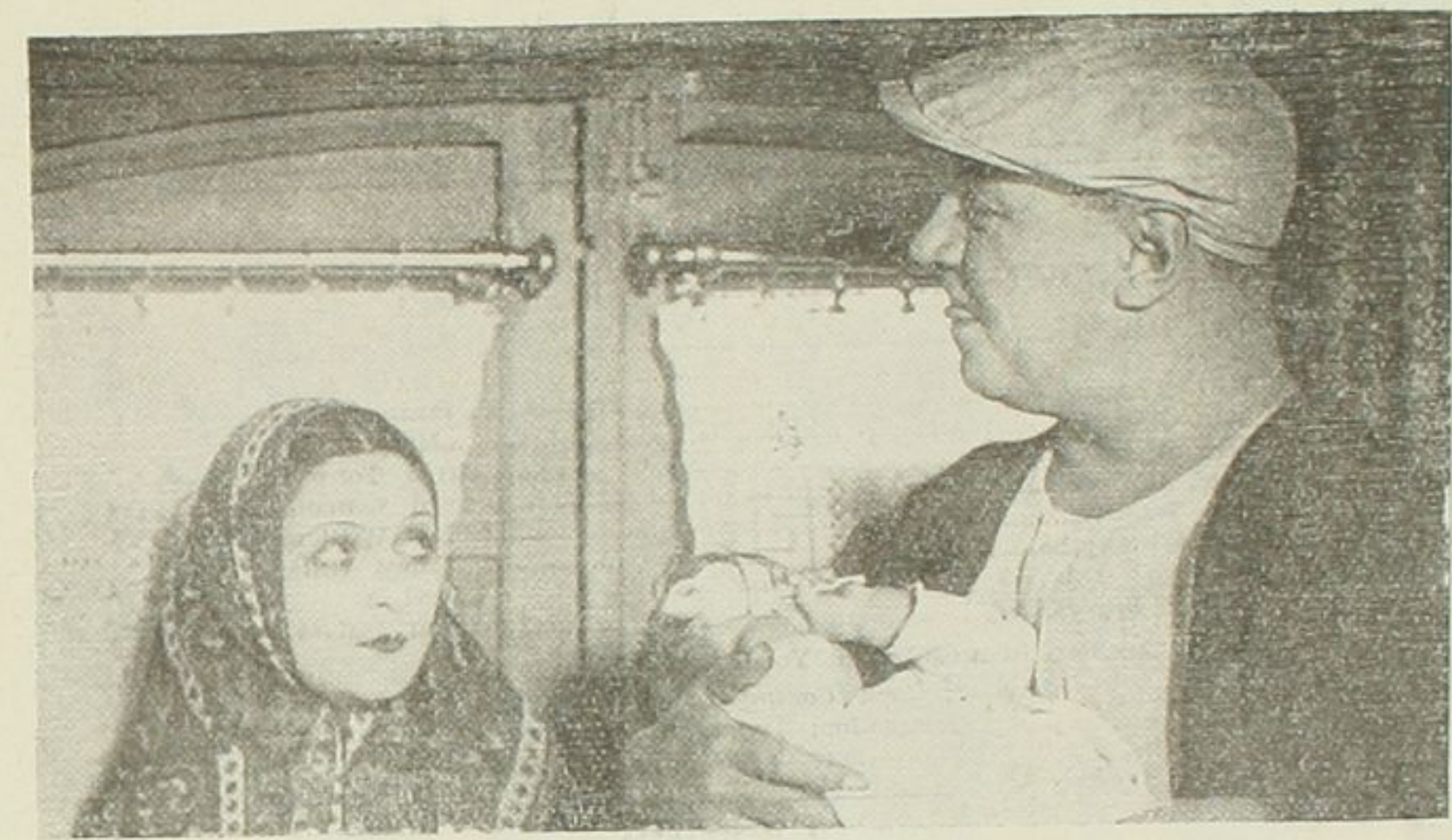
一冊

此書糸印百顆許を収め、各顆の鈕
を同刻する甚精也。糸印の珍なるハ
字あるありしと其の鈕あり。此冊子
ニ收あるもの鈕皆甚に奇也。卷
頭に鎌倉幕室の「波古得脩綆」の
題字ありしと、何人の花印なるを

知らず、余毎うゝ糸印鈕譜といふ
生半し。紐の各種を悉く加故らう
大改の平瀬家：糸印百顆ありし
ニ元或ハ見え、余未だ不知、余の家
ニ五十顆あり、鈕の三のりるもの十の
ハ八九を占む、此譜收むる所を
見ると、家花のものと同しきハ云に
少し、依つて此印の鈕の多し種なる
を今更らるゝ意する也

の世況と新舊武花の映意をえら、其
の日に刻をえらうも其のまハ空早う
映意のち

トム・ブラウン、スクリーン・デビューは、この映画から



福ムウツア社超特作映画

グリエテ 全十巻

F・A・デュボン氏脚色監督
カール・フロイント氏撮影

親方…… エミール・ヤニングス氏
彼の妻…… マリー・デルシヤフト嬢
ヘルタ・マリイ…… リア・デ・ブ・テイ嬢
アルチネーリ…… ウアーウイック・ウオード氏

略筋——昔は空中で離れ業を演じた一廉の曲藝師の親方は、女房が肥つて體重が無闇に重くなつて空中曲藝が出来なくなつたので、ハンブルグで船乗り相手の小つぽな見世物小屋をやつてゐた。或る日一人の水夫が可愛らしい娘を連れて来て、母親に死なれて身寄りの無い娘だといふので親方は其の娘を取つて世話してやることになつた。娘はヘルタ・マリイと呼ばれ非常に美しかった。親方の小屋で彼女が踊ることになると多勢の船乗り達は先を争つて舞臺の前に集つた。空中曲藝で昔鳴らした親方は機會さえあれば今一度お客達に手に汗を握らせて見たいと空想してゐるところだつたので、艶麗なヘルタ・マリイの肢體は親方の野心を少なからず刺戟した。それのみならず世帯染みた女房に比べると眼も醒める許りの水々しいヘルタ・マリイの苦さと美しさとは男としての親方の欲情を波立たせずには置かなかつた。かくて遂に親方は女房を置き去りにしてヘルタ・マリイと駆け落ちした。伯林に來た二人はウインター・ガルデンで空中曲藝師のアルチネーリと一緒に働くことになつた。その内にも若く男振りの良いアルチネーリとヘルタ・マリイとが戀を語るやうになつた。一人の女を圍んで起る未練々な人間愛戀の姿……

説明 石野馬城 徳川夢聲 伴奏曲目選定 貫洞喜代治



メトロ・ゴールドウィン社映画

大學のブラウン 全八巻

略筋——トム・ブラウンは志を立て、ハーヴァード大學に入學、ポット教授の令嬢メリーさんを見染めて矢も楯も溜まらぬ。元來メリー嬢には先輩の學生ボブが後援者として付いて居る。それをアラウンが間に割り込んで嬢を引廻そうとするからボブが怒つて格闘して相手は沈黙させ様としたが却つてアラウンの爲に打つめされた。狡猾いボブはエール對ハーヴァードの折柄整調を滞いで居たトムに邪智を入れて遂に此の競技をハーヴァードの敗北に歸せしめた。随つて、メリーに對するトムの面目は丸潰れになつた。夏休暇に歸省したトムは再び歸校する勇氣を挫かれて居たが父に激勵されて學校に歸りポット教授に前恥を雪がんと努力した。前失敗からトムは除名されて居たが都合に依つて晴れの試合に出場を許されることになつた。父は父を迎へに停車場に出掛けてこれを知らない、二十分以内に選手達に加はなければならぬと除名される親友のセツトは此の時トムに知らせるために病を押して雨の中を夜の中を雨を衝いて走る電車にセツトの叫びは聞えなかつた。かよわいセツトは哀れ力つきて倒れた。セツトの命を救つてハーヴァードの運命は……

説明 丸山章治 山野一郎 伴奏曲目選定 長谷川秋甫

グリエテ解説

飯田 心美

映画「グリエテ」に於て最も傑出するところは、その感情表現にあると言はれてゐる。此の点について米國のフィルム・ダイリー誌に「Name a Dramas」といふ標題で面白い記事が出てゐるから譯してみることにする。

カメラの巧妙な使用方によつて映画の別個の價値といふものが如何に高められるかといふ立派な實例が獨乙人によつて示された。獨乙一流のカメラマン達は映画撮影に於てはカメラの眼が、すべてを取り入るのだ、といふことを知り、カメラの眼の届く範囲内に物体や人間や事件を引きよせ、それらを自由に扱つた。此の方法によつて驚くべき結果が得られた。

カメラ・フロイントといふ撮影者は、此のアメリカでは余り知られてゐないかも知れない。が、彼は「最後の人」を撮影した人である。「最後の人」は、映画の新しい方面を開拓した作品として、世界的にその價値を認められてゐる。「グリエテ」はその撮影者が最近に仕上げたもので、此の映画を見るに彼が前の「最後の人」の中で既に現はしてゐる或る主張が間違つたものでないことが判る。今までの映画には此れほど工夫された撮影はなかつた。ヘルリンのウィリアム撮影所で造られた此の作品はカメラの非常に眞面目な使用方によつて、劇としての特質が認められてゐる。今までもアメリカの監督で感情をスクリーン上に映し出して成功した人達は、グリエテ「最後の人」に於てはエミール・ヤニングスが感情の全音階を吹ふ、そしてカメラはスクリーン上にそれを視覚化してゐる。

例を挙げれば次の通りである。

ヤニングスは自分の愛してゐる女の不貞に気がつく。彼の熱情がだんだん激しく成つてゆく程が、その顔に表はされる時、半身のクローズアップがあつて、それからカメラはヤニングスの心に入つて行く。スクリーンには彼の考へてゐることが描出される。ふしだらな恰好をした男がカフィーで狂態を演じてゐる様子が閃めくように現はれるとテールが持上つて来て俳優の顔を打つように迫り、やがて消え去る。その時、光りは目が潤るやうな早さでピニツと消える。

それからまたカメラはヤニングスがやつてゐることを見てゐる見物人の眼になることもある。物語りは空中曲藝師の話である。

多くのシーンがヘルリンの有名な寄席ウキウキで、ガルトンで描かれてゐる。深山の見物人の頭上遙かに主役達の姿が眺められる。一方にはヤニングス、一方にはワイキック・ワード。先づ普通の撮影法である。その内にカメラは曲藝師の所へ飛んでワードの眼となる。此れはカメラが網に結びつけられ、電氣仕掛けで動かされたのである。カメラ、レンズは曲藝師自身となつて、その場所からすべての有様が寫される。此れは非常な成功である。

ワードがリア・デ・ブッティを待つ所も素晴らしい。最初、戸口に男がある所が半身のクローズアップで出る。カメラは轉換されて行つて何かの音を聞きつけてゐる。その男の耳だけが殘される。此處で場面が急に變つて二本の足がそのと膝下を歩いて来る。彼女は近付いて来るのだ。映画は此所にも本當の感じを出してゐる。

それからヤニングスが、いよいよ愛する女の裏切つたことをハッキリ知る。彼は復讐手段を思ひめぐらす。彼は戀敵のワードを曲藝を演じてゐる時に落ちて殺してやらうと思ふ。相手が此つちのプラッコに向つて飛んで来た時、差出すべき自分の手を引いてやる所を想像する。と、何干

人といふ見物人の頭がスクリーンに向つて突進して来る。墜落幻想は此所に完全に描き出されてゐる(以上)

「グリエテ」の監督者たるエー・アー・デューボン(は今年三十六才の壯年だといふ事であるから)途は大いに洋々としてゐるわけである。彼は獨乙ウィリアム地方からヘルリンに移つて来て新聞記者と成り、映画批評をしてゐたが暫くして一新聞の主筆と成つた。その後記者生活をやめて映画製作者として立つことを決心した。そして八、間ドイツとイタリー、映畫界に働いた後、一九二五年「グリエテ」の製作にとりかゝつた。それ迄の年月、脚本も書き監督もした。「ホワイト・チャール」白孔雀」その他を作つてゐる。ウィリアム社に入つたのは「ヨイ・マイ」と知つた關係からであらう。彼は「グリエテ」の中に撮影者カール・フロイントと協働合つて稀れに見る優れた撮影法を採り、カメラ・アングル

の模範を示したが、此れに就いて彼は次の如く述べてゐる。「カメラ」の正確なる位置は或るシートの成功に重大な關係があります。カメラといふものはフィルム・ドラマの本體を形造る所の出来事を反射する鏡に他ならないのです。併し此の鏡の取扱ひ方は非常に複雑してゐて立派な結果を収め得る人間は極く僅かしか居りません。映画といふものが出シヤバラない観客の眼に映じた人生の姿の再現に他ならぬものである以上、観客に對してはカメラの存在といふことが、出来るだけ氣付かれぬやうに注意することが大切であります。

カメラの能力範囲は勿論いつも限られてゐます。カメラを正しい位置に置くには常に深い注意と考へを要します。普通人はカメラの範囲が限られることを知らないために、このやうなことに無頓着です。映画の價値といふものは俳優の演技やセプトの巧拙によつて定まるのではなく全くカメラ・アングルの選び方一つにあるのです。カメラな

正しい位置に据ゑることによつて、すべてのものは救はれるのです。上等でないセプトもカメラの向け方で面白く見られ、不キリコウな女も美人になります。此れに反し拙劣なカメラ・アングルによつて寫されたもので偽付けられないものは一つもありません。

「グリエテ」を撮影したカール・フロイントは全世界の映畫界から注目されてゐる傑物である。彼は映画に對して深い理解を持ち、自身自身の道を開拓してゐる。「最後の人」の出来の陸にはカール・マイヤー、L.W. ムルナウ、エミール・ヤニングス等の他に彼が居ることを忘れてはならない。彼は監督ムルナウと共に「フアントム」を撮つてゐる。「フアントム」を見た者は誰もあの當時既にあの映画に「最後の人」の芽生えが躍る氣分を仄見えてゐたことに氣付いただらう。彼は獨乙、畫の製作に就いて斯ふ論じてゐる。

「私はいま映画の進歩を妨げてゐる困難の一つは製作者達に獨立性が無過ぎる、即ち他を頼りにしすぎるためだと思ひます。まづ第一が今までの因襲に頼つてゐることです。へまで映画製作者達は舞台劇の種々の失敗を幾度も見ながら或る満足な以て過ぎて来た。たゞ心の中では自分達が仕合せな後継者に成れることを勝手にきめて、所が、それにも係らず彼等は此の傷を負つた舞台劇の模放から未だに足を抜くことが出来ません。それ故、必然的に彼等もまた同じ失敗に遭遇する危険に陥らうとしてゐます。

映画製作者達は何よりも先に映画は映画であつて他の何物でもないと言ふことをハッキリ自覺しなくてはなりません。従つて製作に當つては映画といふ媒介物を通じて始めて生きて来る所の表現方法を創造しなくてはなりません。

○池田金大印(元金三入)より大雅堂の「葛比加
 志帳」をエロカクし、改に附し、そのよきを案
 せしめ、美濃紙を収まに折り帳原形に纏
 るるより、表題に大きく「葛比加志帳」脚
 二大雅堂と署し、小巻帳と見せ、へき
 るのみ、其書の和歌記しあり、系紙五頁
 正月より如き、何の字も、やき不ぬる。
 新巻の巻、及淋漓なる。酒代、油代、米代
 及物代、あいのふん、どし代と、いふ、こん、や
 代と、等、見、れ、儀、々、押、毫、料、の、収、入、を
 録す、當時のお飾を、あ、す、と、い、ふ、一、二、を、採
 せん、八、右、の、如、し

一 二 三 四 五

れんおろし
 野の七印

一 三 五 七 九

山崎と押毫
 料お飾

一 二 三 四

れんおろし
 八平版

押毫料 康三三

一 金 沙 紙 文

酒 五 合

二 三 四 五

米 三 升

三 四 五 六

上 酒 五 升

四 五 六 七

裏 八 人 分



八月十日の記

病氣ニ付世のたまを思ふ

人言責ある人ニはとこさぐし

人好みある人ニはとこさぐし

ゆきも若ぬかむ

くさの世さうけり

さうけり玉の

花の芽出ぬき

初氣来る

思ひきや春さるる世に生れ

花七つ美七つま枯れんは

(ついで)

妻

出、はる清く流るる水のうん

床の床におりの積り

八月十日の記

待宵の月

又また来たる月夜の白

みよもみ深る

宿屋の酒

妻、玉世園の山の句

世の大難とある人、世の難天壽三人が三島に
登りたる時、互ひに心を忘るる千帳

あり、其一斑、近世書畫の流に收め、此の比加、
帖、其の優りて而るるも、よも也、五月廿九日
記

稀書複製會々報

第五期
第七回

昭和二年
五月

第五期 第七回配布本解説

今回は、『異素六帖』下巻と『鹿野武左衛門口傳咄』
下巻と二冊配布いたします。前者はこれで完結しま
したが、後者は先づ下巻を發行して上巻を後日に譲
ることになりました。斯様な前例は本會には一つも
ございませんが、今度は下巻の損所を補ふ爲
に其の彫刻を急ぐ必要がありまして破格の舉に出ま
した。どうぞ御不便を御忍び下さいませ。次に兩書
の解説を掲げます。

鹿野武左衛門口傳咄

上下 二冊

(原本 安田文庫藏)

本書は鹿野武左衛門の著せる大形の笑話本にし
て、菱川師宣の筆に成れる挿畫あり。刊行年月を明
記せざれども、上巻第四章の咄の中に「去年の火事」

といひて、師走の廿八日駒込の寺より出火し江戸市
中を焼きしとあるは、天和二年の大火なるべく、ま
た下巻第二章の咄の中に「ゑんはうの年號がかはり
ましたにより天和と申しました」との詞も見ゆれば、
これらより推考するに、天和三年の開版なること確
實なるが如し。版元は卷末に記しある通り大傳馬町
二丁目鱗形屋なり。本書は『笑話目録』中にも書名
見當らず『遊戯起原』には、ただ『鹿野武左衛門口
傳はなし』ありとのみ記され、かの絶版の故を以て
著名なる『鹿の巻筆』よりも遙に傳存の稀なるもの
なり。わが複製本の底本はもと平出鏗二郎氏の藏本
にして今は安田文庫に屬す。上下二巻あり。下巻初
丁より四丁までは紙の上部に甚だしき缺損あるを以
て、故渡邊霞亭氏の遺藏本(零本)に據りてこれを
補ひたり。上巻は紙數十五枚にして初半丁は序文、
次に見通しの口繪ともいふべきもの、其裏半丁を目

あり、其の初は世書書、其の次に此の比加也

次とし、本文は三丁より起り十四章の笑話と挿畫七圖を収む。下巻は紙數十二枚にして三十丁に起り四十一丁に終る。初半丁は目次、次に見通しの繪ありて本文に移り、十六章の笑話と挿畫五圖を掲げ、最後の半丁を跋文に充てたり。按ふに此の上下兩卷の間に、十五丁より二十九丁まで紙數十五枚の中巻ありて、上中下の三卷より成れるものなるべけれども未だ中巻の存在を發見し得ざるを遺憾とす。故にしばらくは缺本のまゝ複製して、中巻は汎く大方の援助によりて出現せんことを期待す。

江戸に於ける笑話の鼻祖鹿野武左衛門は、天和真享の頃辻ばなし、座敷咄しを業として中橋廣小路の見世物場に蕙張りの小屋を設け、晴天には出演して木戸錢六文宛を取り聽衆を集め街頭を賑はしたれば當時『武左衛門の居るは賑はし涼臺』の句もあらはれし程なりき。その咄し振りは京の嵯峨野に快辯を弄せる露野五郎兵衛と對峙して相下らざる仕形咄しなり。而して彼れの特色は、本書の序文にも「ある時は見しこと聞きしこと或は露跡形もなき事をも笑舖仕かたしてはなし」と言ひ、または是れより十年後

の元祿五年に刊行されし『鹿の卷筆』の跋文にも「跡形もなきそら言を見て來たやうに言ひ續くる」と言ひて、彼れが咄しの種を割り居れり。要するに武左衛門の咄しは根なし事を面白をかしく、舌と姿に働かせて聽衆の頤を解くを主とせる如し。後世の落語なるものは多くこの仕形はなしの形式を辿り、咄しは落ち即ちサゲにて其咄しに生命をもたしむるを例とすれども、仕形ばなしの本體はサゲを中心とするものにはあらず。サゲを主とする咄しと、仕形を専らとする咄しとの關係は、恰も茶番と俄の對照を觀るが如き感あり。さて當時の笑話仕形咄しのみならずしかといふに、然らず、既に元祿七年版石川流舟著の『正直咄大鑑』(既刊)を見ても、咄しの構成は一が落ち、二が辨舌、三が仕形といふことを標榜し居れり。これらの形式が影響して後世の落語を誘導したり。そは洒落や語呂の發達に隨伴して話術は圓滑になり詞遣ひは敏捷になり行ける自然の結果なるべし。

落し咄しの起源は『正直咄大鑑』の解説中に既に言へる如く、初めは戰國時代に雜談と稱したる彼の

お伽衆の咄しなりしが、一轉して辻ばなし、座敷咄しとなり、たゞに面白可笑しく喋舌るのみならず動作をも加へ、耳と目を同時に喜ばしむる仕形咄しを出現したり。即ち後の天明振りと稱する形式を除けば他はすべてこの型を追ひ、語呂にて落すものと考へ落ちとの二種となれり。而して仕形咄しの勃興については萬治四年版中川喜雲著の『私加多咄』が與つて力ありし如くなれども、自然の趨勢の然らしめし所とも見られざるにあらず。或は當時の演劇中の動作などと關係する所なきか。例へば戰場より注進に立歸りたる手負がチョボに乗りて、イデ物語らんと且つ語り且つ身振りする場面など、相影響する所ありしにあらざるか。疑を存して大方の垂教を俟つ。また詞の上より見れば純粹の東國語にあらず。此頃の江戸詞は尙ほ關東、三河、上方の混同時代にして劃然たる東西の區別なく、木に竹を接ぎたらん如き不調和なきにあらず。蓋し江戸詞の一定したるは天和真享より六十餘年を経たる寶曆の頃なれば、序文に「むまれは津の國の難波」とあるも、彼れが出生地を語れるならん歟。笑話本の文體は口語體を主と

せること勿論なるが、用語漸次に進歩して後の人情本一流の會話を以て組立つるに至れり。而してこれらの笑話を味へば、落語は稍主觀的の傾向あり、仕形咄しは多くの場合むしろ客觀的に構成せらる。この形式が續きて天明四年に至り、江戸の狂歌師連が柳橋の河内屋に集まりて落語會なるもの、開催を見たり。これ實に天明振りの短き落語の萌芽なりしが、寛政度には石川宗叔あらはれて從來の仕形咄しと落語とを一團に融和し現在の落語様式を大成したり。されば戰國時代の雜談以來の傳統的笑話に劃時代的革新を加へ、仕形咄しの長所をも採入れ天明振りを壓倒して落語の形式を完成したるは實に宗叔の力なり。

鹿野武左衛門は、江戸長谷川町に住し塗師職なり。後辻ばなし座敷咄しを業として世に行はる。元祿七年二月廿六日罪を得て伊豆の大島へ流され、六年間を経て同十二年四月赦されて江戸へ歸りしが、流竄中の疲勞にて同年八月五十一歳にて歿せり。本書序文中に志賀氏とあるが其の本姓なるべきか未だ明かならず。流刑の次第は元祿六年惡疫流行に際し、

お伽衆の咄しなりしが、一轉して辻ばなし、座敷咄しとなり、たゞに面白可笑しく喋舌るのみならず動作をも加へ、耳と目を同時に喜ばしむる仕形咄しを出現したり。即ち後の天明振りと稱する形式を除けば他はすべてこの型を追ひ、語呂にて落すものと考へ落ちとの二種となれり。而して仕形咄しの勃興については萬治四年版中川喜雲著の『私加多咄』が與つて力ありし如くなれども、自然の趨勢の然らしめし所とも見られざるにあらず。或は當時の演劇中の動作などと關係する所なきか。例へば戰場より注進に立歸りたる手負がチョボに乗りて、イデ物語らんと且つ語り且つ身振りする場面など、相影響する所ありしにあらざるか。疑を存して大方の垂教を俟つ。また詞の上より見れば純粹の東國語にあらず。此頃の江戸詞は尙ほ關東、三河、上方の混同時代にして劃然たる東西の區別なく、木に竹を接ぎたらん如き不調和なきにあらず。蓋し江戸詞の一定したるは天和真享より六十餘年を経たる寶曆の頃なれば、序文に「むまれは津の國の難波」とあるも、彼れが出生地を語れるならん歟。笑話本の文體は口語體を主と

偶々馬人語を爲してこれを豫言し、又南天の實と梅干とを煎じて飲めば羅病せずと云へりとの風説あり。南天の實と梅干の價忽ち騰貴して二十倍を越えれば、六月十八日町奉行能勢出雲守より觸書を出し嚴重に流言蜚語を取締りたり。然るに其の前年武左衛門の著『鹿の巻筆』發行せられ書中に齋藤甚五兵衛といふ役者見習が、市村座に於て馬の後脚を勤めながら見物に挨拶する笑話あるを以て圖らず馬疫の流言に連坐して奇禍を買ひ、梅干うらなひの方書を出したる神田須田町の八百屋惣右衛門、浪人筑紫團右衛門等と入牢し、翌年團右衛門は死罪、惣右衛門と武左衛門は流刑、版元の本屋彌吉は追放、梅干占の本と『鹿の巻筆』は焼き棄てられたり。この『口傳ばなし』は『鹿の巻筆』より一昔前なる天和三年の出版に係り、彼れが霸氣鬱勃たりし三十四五歳頃の作品にして、中橋廣小路に莖張りの陣營を構へ人氣を集めし全盛時代なり。

挿畫には署名なければ、延寶末より天和に至る、菱川師宣が全盛期の畫風に相違なし。師宣は『浮世繪類考』に「大和繪師又は日本繪師とも稱す、房州の

人也」とのみあり『追考』や山崎美成の『名家略傳』には、縫箔を業としその上繪を描んために畫を學びたる由を述べ、享年七十餘にて正徳年間に身まかりぬと見え、なほ『名人忌辰録』には「正徳四年午八月二日七十七にて歿す」とあり。師宣の年齢については嘗て疑ひを抱きつゝありしに、近ごろ水谷不倒氏は『日本文學講座』の第四卷に於て「小説の挿畫から見た菱川師宣」の題下に詳説されしものあり。同氏は師宣の享年を殆ど不明なりとせられたり。正徳を歿年とする説も京傳の再考によれば、元祿八年四月の『委繪百人一首』の序文に「菱川が古人となりしかたみなれば」の語句ありて、該書の出版以前に歿せしこと明かなり。晩年郷里保田の別願院へ釣鐘を寄進せしは事實にて其鐘今も存在せり、寄進の年月も「元祿七戌歲五月吉日」とあれば、七年五月までは存命と見らるべく、その後『委繪百人一首』の刊行されし八年四月までの間に歿せしと見ゆれども此書は遺稿として刊行されしもの、如くなれば、歿年は何歳なるか確かならずと言はれたり。またその性格も世才に長けたることを論せられたるが、この

『口傳咄』を見ても上卷の劈頭に自家の出來事を笑話に仕組ませ、且つ自己の住宅、自己の繪姿を描きて世人に接するに抜目なき状も見ゆ。但し當時の浮世繪師の住宅に斯く玄關構への嚴めしきものありしや、覺束なし。町家住ひの職業畫工の地位が斯く堂々たりしとは、大に割引して考へざるを得ざれどもたとへ自家宣傳にもせよ斯かる挿畫を臆面なく掲げたるは珍とせざるべからず。また『名家略傳』にはその笑話を潤色して、師宣傳中の主なる記事として載せたり。要するに師宣は寛文末より版畫に筆を染め、延寶天和を盛時とし、元祿に入りて稍や下り版となり、同七七年に釣鐘鑄造の頃は不起の病に罹りて繪筆を絶ちしならんと云へる水谷氏の説は、不明なりし彼れの歿年を推考し得たるものと云ふべし。爰にその高説を引用することを許容されし同氏の好意を深く感謝す。

北州異素 六帖 上下 二册

序文には无々道人の戲號を署しあり。筆者は澤田

(原本 早稻田大學圖書館藏)

東江なること『洒落本目錄』にも記せり。刊行は寶曆七年正月、版元は東都淺草御藏前茅町二丁目六阿亦次郎、同本材木町四丁目柴田彌兵衛の合板なり。上下二冊より成り、上卷は丁附十四丁にて、序文三丁跋文一丁半、本文は四丁に起り次に「五ノ六」と記せる一丁あり、すべて八枚半とす。賣色論争より五十五の課題を選びて遊里の内幕を穿たんとする順序を豫定す。下卷は紙數三十二丁ありて、豫選せる題毎に古詩の一二句、古歌の下句を對照させて輕妙なる説明を加へ、奇警なる挿畫を配したる、變體の洒落本なり。

本書の序文中にも北州の文字見え、題簽にも北州を冠し居れば世界は新吉原なり。當時即ち寶曆度の新吉原は、元祿の豪華凋落して昔日の觀なく、吉原を代表する太夫も寛延末より寶曆の初めへかけてはたゞ一人寂しく最後を飾りしも、やがてそれすら滅び行きて揚屋町も名のみに残りぬ。されば吉原の衰微は言ふまでもなく、加ふるに享保の壓迫に打撃され、吉原に關する書籍の刊行も極めて寥々たりしが再び復活の氣運動き、將に來らんとする安永天明度

に於ける遊戯書類の頻發に魁けて、寶曆年間には徐々に吉原書籍の刊行を見るに至れり。試に『續吉原書目』を見ても寶曆中刊行のもの廿三部を挙げたるが、其十八部は細見にして其外は五部に過ぎず。また『洒落本目録』を繙きても僅に四五部に止まれり。この間に介在して刊行されし『異素六帖』は、澤田東江が尙ほ林家の門に出入して程朱の學に心を潜めつゝありし廿六歳の壯時なり。當時の彼れは世間の俗習を追ひ遊里の實驗をも積みて事情に疎からざりし如し。一面に於ては聖賢の道を講じ、他面に於ては所謂粹士となりて、かゝる著述のあるは頗る矛盾せるが如く見ゆれども、また其頃の世相を赤裸々に語るものとも言ひ得ざるにあらず。東江には本書の外に醉郷散人の名に隠れて『吉原大全』の著あることは人の知る所なり。その書風の吉原廓内を風靡して行はれしも故ありといふべし。

この書の特質としては、専ら遊女の甲乙を品臨する評判記流を離れ、遊女や嫖客のアラをば優雅なる古詩古歌を引きて穿ちたる點を異彩とす。即ち上巻は、佛者、儒者、和學者、三様の口吻を繕りて賣笑は、佛者、儒者、和學者、三様の口吻を繕りて賣笑

に關する論争を戦はせたる後、遊女の風俗種類よりその秘密、嫖客の批判等について五十五の項目を掲げ下巻には其の解題として詩歌を引用し、初一段より二十二章までは遊女の種類、常態、身の止、心意氣等を擧げ、以下十二章は客を皮肉的に批評し、三十五段以下十一章は雜事に於て廓内風俗等を主とし、四十六段以下五章は遊女の秘事に觸れ、五十二段五十三段は客の言動を載せ、五十三段以下二章を總收としたり。

澤田東江は江戸の書家として其名高し。名は鱗、字は文龍、通稱は初め文治また文次郎、後文藏といふ、東郊は其號なり。兩國橋畔矢ノ倉に住するを以て人東江先生と呼ぶ、遂に郊を江の字に改む。なほ來禽堂、萱舎、青羅館、玉島、无々道人等の別號あり。享保十七年江戸に生る、家累代の商賈なりしが東江長ずるに及んで學を好み、林風岡の門に遊びて専ら程朱の學を修め、また書法を玄願齋に受け時人の知る所となる。その筆法は明の王履吉の流を汲み最も草隸に巧みにして六書に通曉せり。隨て文人墨客との交際も廣く東江流の書體大に行はれ、殊に新

再び會費御拂込について

稀書複製會と隨筆同好會と兩方へ御加入の御方は二口の會費を合併して一枚の振替用紙で御拂込下さいませ。たゞ振替用紙の通欄に其内譯を御記しおき下されば、記帳の時に便利を感じます。

隨筆は毎月二十日、複製本は二十八日と、發行日をきめては居りますが、大抵その二三日前に製本が出来ますし、發送準備は五六日前から着手します故に複製會の會費を二十日までに、到着するやうに御拂込下されば最も好都合でございます。振替貯金の御拂込から到着までには遠近に依つて二三日乃至四五日を要します故、成るべく早めに御拂込を願ひます。振替用紙は毎月配本の中に入れておきます會費の領收證は地方一般に差出しません。特に御請求がありますれば御送りします。

未刊隨筆百種について 會員諸彦の御援助を乞ふ

雜誌よりも價を安くして書籍を濫賣する事や、お

次回刊行豫告

千代の友鶴 下一冊
小口 あはせ 上一冊

この外既に彫刻を了つて發行の時機を待つてゐますものは丹緑本の『鳥の歌合』色摺本の『浴衣合』黄表紙の『三升増鱗祖』の三種で『おしゆん傳兵衛十七年忌』は彫刻進行中です。

あつた、其の初、近世書寫史、又、その七、おしゆん傳兵衛

このための遊戯書願の頒發に懸けて、寶曆年間には

祭騒ぎ以上の大宣傳をして讀みもせぬ者に本を賣付ける事は、書籍の威嚴を傷つけるものだといふ三田村氏の平素の主張もあり、又實際のところ米山堂にはそんな餘財がない故を以て『未刊隨筆百種』發行の當初から今日までに六七種の新聞紙と二三種の特殊雜誌に二三回廣告したばかりで、一度自ら大取次を訪問することもせず、何等の宣傳も何等の勧誘も試みませんでした。こんな緩漫な方法で六百に近い加入者を得ましたのは、偏に同好者諸彦の御同情に依る事と深く感謝いたします。さて第一巻も第二巻も壹千部製本してあります。千部以下では印刷所も製本所も快くは引受けませんのみならず、實際それでは算盤が持てません。若し現在數のまゝで毎月四百冊以上の残本を擁し、二十ヶ月に八千冊を剰しますやうでは經營にも影響を來します。それに回數の進むにつれて若干の落伍者を出すことを考慮せねばなりませんから、此際何とかして壹千名まで漕付けたいと存じます。微力なる經營者には施すべき手段もなく、奇抜なる智恵も浮はず。只一筋に會員諸彦の御援助に頼る外はありません。若し御一人で新に一名を御紹介下されば忽ち定員を超過することになります。私共の共存共榮主義を御賛成下さいまして、どうぞ深厚なる御援助を賜りますやう懇願いたします。

に關する論争を戦はせたる後、遊女の風俗種類より

會費は高いに相違ありませんが、現在の會員數から打算すれば必ずしも不廉でないやうに考へます。一冊四百五十頁内外と豫告しましたに拘らず、今日でも四百五十以上は屹度組入れて居ます。若し千名に達しますれば一層紙數を増加しますことを爰に御約束いたします。

索引の事

隨筆の索引は一種毎に編成してあるのは檢索に不便だから、一冊毎にまとめて編成せよといふ御注文もございましたが、暫く此儘で續けさせて頂きたいと存じます。幸にして將來事情が許しますならば、二十冊完成の上全部共通の索引を作成して實用に共したいと存じて居ます。共通の索引でなければ十分に効果を奏することが出来ません。

第五期既刊書目

- 第一回 長崎無盡物語 友禪雛形卷一
- 第二回 金々先生榮花夢上 友禪雛形卷二
- 第三回 猫鼠大友眞鳥 千代の友鶴卷上
- 第四回 金々先生榮花夢下 千代の友鶴卷中
- 第五回 青樓咄の繪有多 友禪雛形卷三
- 第六回 異素六帖卷上 友禪雛形卷四
- 第七回 鹿野武左衛門口傳咄下 異素六帖卷下

○日本銀行後敷然果の思懐も就て責任の無い
 津心は百いかに内憂が皆つても自ら辭職の意なき
 あるはもろくも辭せざるも夢思の如くは内憂
 の事柄花おを自ら招へて與ふ座をしいて
 の席上高橋も何ぞ泣き無つれのか之を
 と玄関、出て、かゝる遊戯も終裁もおの氣
 の毒心か辞表を出して母も心と云つた
 此の市来も敬つたといれとい右もあるべきであ
 る、此流は氷の甘露も冷たいよといふ、地を
 こころれ物つたがけの辭職勅告といひ、前
 例のまゝのことである、市来へ山本を(如)系

どあるけんいふ。月心と無沙汰を続けしおれ
といふ。又作りニラミシトと見(る)

○三重縣四日市市映画時報社
開化三といふ未だの人と云ふ方の古詞を
セオある。余が逸草中一の縁切寺の死人
の事やいふや余が勇つて放送しし事也
之と映画劇：仕込といふも、實に余も
レントを得る也余の此の口マシテワクの史蹟
を何れ劇：上はさるいふやと逸草中に古
き事と云ふ也

五月廿九日記

おぼ、未だお肩の保を得ずいふ。小生は強ゆて昔
著「若城隨筆」の読者に有之。現在映画時報の
編輯に従ひ一紙一居る者に有之い。
扱て、御著をお見致しし知。昔中の一文「縁切寺」あり
もの、非常には小生の心を動かし、是非共、ある種
たるものに致さんと考へ居りし知。名君屋の友人から
の切ふる希程に持り、先般一篇の映画物語をかき
上げ、昨般名君屋中矢放送局から五月兩草紙
縁切寺の由来したる標題で、放送仕りい。
放送者は南九州なる映画解説者にて、中京説話會
の元老に有之。十歳劇場の管絃樂團も件奏不
し、お書中おセンセーションも甚だ起りい。

小生の著眼は一小説に在り、近頃流行の叙景映
 画とは、少しく型を重しにたは、尋常の興味を呼び、
 自分も、喜ぶと有り、然れども、有るは、
 甚るる、同輩ながら、貴著のお文法にて、斯く成功得し
 ことを羨び、近く映画劇にあらず、其社に申込、
 有る、これに完成の節は、是非貴著に供し、
 先ずは、俸禮、たゞ、情、知、道、斯、心、情、度、
 好、号

五月二七日

藤間純三

市島詠吉 様

小生宛は
 四日市市神田町豊田佐一宛

今日神田のふり、
 祇園南海の詩文集、
 の編する所、
 長堅、
 邦と好、
 る稀觀、
 を好す

詠江梅
 美人在時人如花
 成未測
 無語
 紅兩

江州僧某以念佛终闻只池中结宝莲
为题请诗及画聊赋一篇且方一枝以
贖

佛名一念结一莲十百念来十百莲千亿万念
千亿万念大千皆宝莲谁知一莲非一莲大
地山河原一莲我在莲中不知莲一口终开即
是莲表不见钵中之莲火中莲依然池
中念佛草

题江天欲雪图

江天漠漠晓渡口人行稀
岛嶼布帆白
村烟火微
鹭噪枯柳
冻路鸟立寒
溪路谁家子
尊中得酒归

寒衣鐘聲

霜白北山夜
冰玉漏分一
秋梅外月
数里
西雲野店
雞傳曙
沙汀雁
喚羣
愁
人
耿不寐
何忍枕頭
夢

賦得寒村幽事多

荒村野橋外
落日倚紅梅
石出涵梁淺
雪
明年穀登
并橫立竹
為鳥鐘
與及山
僧行
續東隣
夕
螢
中
裏
燈

○新詩の人の成り久花長井雲保の書集を刊
克し一人を以て余の題辭の相毫を乞ふ
余為の二三枚を書し任意選擇せしむ

一云く、身實高道高、他日一云く「愛幻年
 集大造化、後語、終南海の句を摘す
 也
 六月一日記



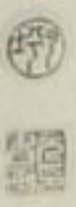
青山翁墨履雪屏紙樹
 凡涼多自鳴最也迷人無
 一事一語塵猶生者實度
 比法辨年十月下院
 以國羊之人 庚子年

○物又彼の編輯、史あり文藝俱出部、余が
 後法をぬめんとし、物あり文藝俱出部、多く
 一夜を載せしものと、近來、事定法の時味ある
 ことを載せしもの、名流の日記の如き、語ること
 ボツと見え、時々の請求、之を令息攝の還
 る、二十年前、京都鴨川の道、院樂と
 するの旋念、おらり、折、其旋念の女將が
 目の女、りり、見え、お松出世物、後とお松と木戸
 公のローマン、公が幕府の捕吏、之を哀めらん
 乙、丹波、之を念生法を、之を哀れ、之を哀れ、之を哀れ
 乙、母を哀れ、之を哀れ、之を哀れ、之を哀れ
 ○昨夜、某席、の合、年上、行々、浪海を、船、船、味

一三云く、身實高道高他日三云く「夏幻手
 弄大造化後語誌南海の句を摘す
 也
 六月一日記



青山巖壘獲雲屏松樹
 凡涼多自鳴最也遊人無
 一事一語塵獨坐看黃庭
 此法辨年十月下院
 蘭亭山人 庚子雲坪



○物又坂の海輪 賢より文藝倶来部と余が
 談話を収めんとしをゆめ文藝倶来部と多く
 や流を載せんとしゆ近來事々々落の情味ある
 このも載せぬ、若流の日記のゆめと語るよ
 ボツと見ゆ、咲咲の請求に元令息構の違
 る、二十年前京都鴨川の道院樂と
 まの旋念に相りたる折、其旋念の所持か
 目の女りり見えお松出世物語とお松と木戸

大客船の語も出た。或る洋行物屋の一客ハクリム
ロウク船のことを語る。船も何番船をいへることを
少くも大船の語を、物も人間ハ完分ハ蚊や
蟻のことに船の大体をグラスブすることか出来
るハ、甲板も一面する丈ハカヌーもあつた。一
等室と云つても式層ハあつて、立階ハ廿下つて
カホ一等室である。人をもとて意のある感も
いふべき、誇り出た。併し何人ともあつた船も
親しむがある。一度生乗し此船に存心洋中
の七七出金も懐しの思ひがある。昔ハカ船を
女性に譬えてゐる。偶れもある。日本ハ船必も
〇〇丸といふ。謂ふも話説がある。けんといふ。若い

愛する兒を呼ぶ丸の字を以てする。同じ譯
ひあらう。丸と云くハ柔か味も懐かし味も花
つとぬることと思ふ。的次の初年ハハ確カ
おいらん丸と名を命し、これの古もあつた。いとら
世性ハ古ヨシナ花ハ咲く。露骨ハこき
さアハく

五月二日記

〇日ハ中世紀ハ支那の南方を管へた後冠
を支那ハバハンと呼んでゐる。各船ハ幡
大善菩薩も難船ハ取扱ハ船中ハ登つてもおり、
船ハ自身ハ幡丸ともいふ。此の支那ハバハ
ンと呼んたのがあつた。日本ハ終ハハ同トク
バハンと呼んた。公又者もあつた。書き流句

やん説ま北のバハンを用いた例しかゆらくるもの
もと海賊の意で、盗志ことをバハンとも云ふれ
るんが後二一語して密貿易をもバハンといふ例
日ろう丸四のちる字書るんバハン日賊の義も
ありス、グリングの義もあるもちるにおる支那
の文者の内るの破帳と書いてバハンと後まも此
例もある蕃船と書いてバハンと後まも此例もあ
るが皆倭寇の意をも寫ししての文字とあ
ることといふも亦あるの支那の書公の征韓
七征の七皆る倭寇の延長とあると解してある
といふが無現るものこととあるも亦公の意
味に於てバハンとある、るん八回を盗志といふ

文が大きいのか、お平からるんが又強うバハンと
あるもあつて
六月二日録

六月三日 坊間二二三の圖考を繕ふ

一 白石先生傳稿 三冊

北古湯度常山の年譜本より各
巻に常山の印記あり、板紙頭
多く者入あり、墨書常山の者
はんど尚研究を要す、藍者三
ヶ所、山一々常山の年書、被葉
とあり、土屋鳳沙の家より出づ

一 墓碑考

二册

伏見米谷金城の著す所金城龍
公美にその後皆川伯恭に河内
す小石元俊と親善といふ此者金
石草編の収ある所元以下に及の
七を補ひて漢文に及ぶ漢文也
和撰の墓碑考板書を稀
也此とすべし 弘化三年小石
龍の跋あり

一 琴園の彙合

一册

此者文芸博士小杉樞村の自序本

十二
南

也前田夏蔭を判者として弘化四
年九月當時の名士の歌合也琴
園の夏蔭の類し 樞村 世年
の頃の古字と見し

一 入宋三僧傳

一册

の治平十二年細川潤次郎の輯ある
所入宋の僧齋然、寂照、安光三
僧の事蹟を法書より輯録し
てこのものも十通の著書多く海
布するも此者ハ稀なり見所也

一 紹衣福

一冊

ことし伊藤半田嶋の百五十年忌
 ことし堀川氏祭事をもとみ此方を
 排印し曰ぬに願つ此書は京都詠家
 中の心を輯りてその上巻は文下
 巻の詩也収録の付始めて世に現
 はるべきもの多し。巻尾に内巻湖
 南の跋あり。半田嶋が家名に起
 故も創見あり。ことを奉けし
 高田半田所贈也

拜啓 愈々御清穆之段慶賀致候陳者早稻田大學
 名譽教授逍遙坪内雄藏博士が我が國劇向上の
 殊勳者たりし事に關しては何人も異議なき所
 と存候が明年は同博士の古稀の賀に相當する
 と同時に其半生の研精に成れる沙翁全集四十
 卷の翻譯も完成せらるべき筈に御座候就いて
 は之を機會に博士の業績の記念として東洋未
 曾有の一演劇博物館を創建し以て前後四十有

餘年に互れる博士が多方面の文勳を顯彰し兼
ねては之を以て永く斯道の公益機關たらしめ
たく切望致候
演劇博物館の創建を以て博士を記念すべく思
ひ立ち候は一にはそれが博士多年の宿願たり
し故に候へども二には此舉が諸外國に比して
遙かに多く演劇圖書資料及び記念品に富める
我が國の現在に於てこそ最も適當なる又特に
有意義なる計劃と存じたる次第に御座候
公私御多端の折柄御迷惑とは存候へども何卒

前陳の趣旨御諒察成下され深厚なる御贊助を
賜はりたく惓願致候 敬具

昭和二年六月

坪内逍遙博士
記念事業 實行委員

殿

(別紙説明書御覽被下度候)

演劇博物館建設に就いて

(其の由來、構造、内容其他)

一 演劇博物館は其敷地を早稻田大學構内にトして、同學園附屬の建物として建設するのではありませんが、必ずしも一學園の専有物とするわけではありません。廣く斯道の研究機關として公開し、治く一般の利用に供するのが目的であることは、趣意書中に申し述べた通りであります。

二 演劇博物館と稱するものは、歐米には多少設けられてありますが、東洋にはまだ一つもありません。西洋のとて、さほど完備したものではないやうに聞いてをります。その然るは、古今東西に互つて演劇の資料、圖書、記念品を蒐集することが容易でないからであります。ところが、わが國は、坪内博士が屢唱せられた通り、不思議にも前後五六百年乃至千年といつてもよい長期間の國劇圖書、資料、記念品に富んでゐる上に、全く世界に類例のない歌舞伎といふ特殊の劇を有してをる以上、かういふ建造物を設けることは極めて有意義でもあり、必要ともなるのであります。のみならず、其實現が坪内博士の多年の宿願であつた事は、其所藏の劇畫、劇書を早大圖書館に寄贈された事によつても、又昨年『逍遙逸集』の刊行に際して、其收益(印税)の全部を右の目的のために寄贈された事によつても明らかでありますから、かたぐし此計劃は博士の記念といふ事の爲には、至つて適當であらうと考へます。尙ほ博士は、今後更に前述の基金以外の寄與をもせらるべき旨を約されてをりますが、具體的な事は、後日改めて御報告致します。

三 右博物館の建築様式は、博士の案に本づいて、挿入姿圖の如く殆ど全部を沙翁時代の劇場(主として運命座)に則ること、致しました。玄關と見做すべき部分が當年の舞臺です。又研究室、展覽室に充つべき兩翼は其當時の棧敷なのであります。随つて之を其儘適用してエリザベス朝の劇場さながらの演出を試みることも可能であります。斯く沙翁劇場其儘を模しましたのは、建物其物が既に演劇博物館の一大資料たる觀もあり、展覽場としても比較的都合よろしく、且つ我が國唯一人の沙翁學者である博士を記念するには、最も有意義であると信じたからであります。而も斯ういふ工夫に成つた博物館は世界の如何なる文化國にも未だ曾て存在した事がありません。ついで乍ら豫定を申上げておきますが、構造は耐震耐火の鐵筋コンクリート、總三階(塔は四階建)にて延坪約三百坪、此の工費約十萬圓、設備費約五萬圓、將來の内容充實基金として十萬圓、合計金貳拾五萬圓の豫算で、今秋九月起工し、明昭和三年秋までには完成の見込であります。

四、演劇博物館は、劇に關する内外の圖書を包含すること勿論ですが、廣く劇に關する參考資料を、實物、繪畫、模型、標本等によつて展觀し、研究に資するを主眼と致します。例へば、稀觀に屬する圖書、綿繪の中の芝居繪、役者繪等の組織的年代的の展覽によつて、歌舞伎劇の變遷を示す。或は模型、圖版の配列によつて、舞臺の進化史を一目瞭然たらしめる。或は衣裳、鬘、小道具、鳴物等の器具類、從來一般の研究者に開放されなかつた資料をも得て陳列する。あらゆる劇に關する資料の有意義なる整理、保存、研究にも任ずる。劇に關する特殊な展覽會、講演會、研究會を開くこともあらうし、實演上の研究を試みるでもありませう。將來此館の使命とする所は甚だ多からうと信じます。

演劇博物館の材料となるべきもので、早大図書館に保管されてゐるものが既に可なりあります。その中の主なるものを左に列記しておきます。

- 一、芝居繪 (錦繪) 約 參 萬 枚 (内約一萬枚坪内博士寄贈)
- 一、劇に關する圖書 約 二千五百冊
- 一、歌舞伎臺帳 五百餘部約二千冊
- 一、評判 記 (自元祿至元治) 約 二百八十六冊
- 一、狂言及顔見世番附 約 四 千 枚
- 一、狂言繪本 約 千 五 百 冊
- 一、役割番附 約 四 百 冊
- 一、劇場繪看板 (坪内博士寄贈) 二十八種五十七枚
- 一、逍遙文庫 (和漢洋書共) (同上) 五千六百五十七冊 (内洋書一千九百八十一冊)

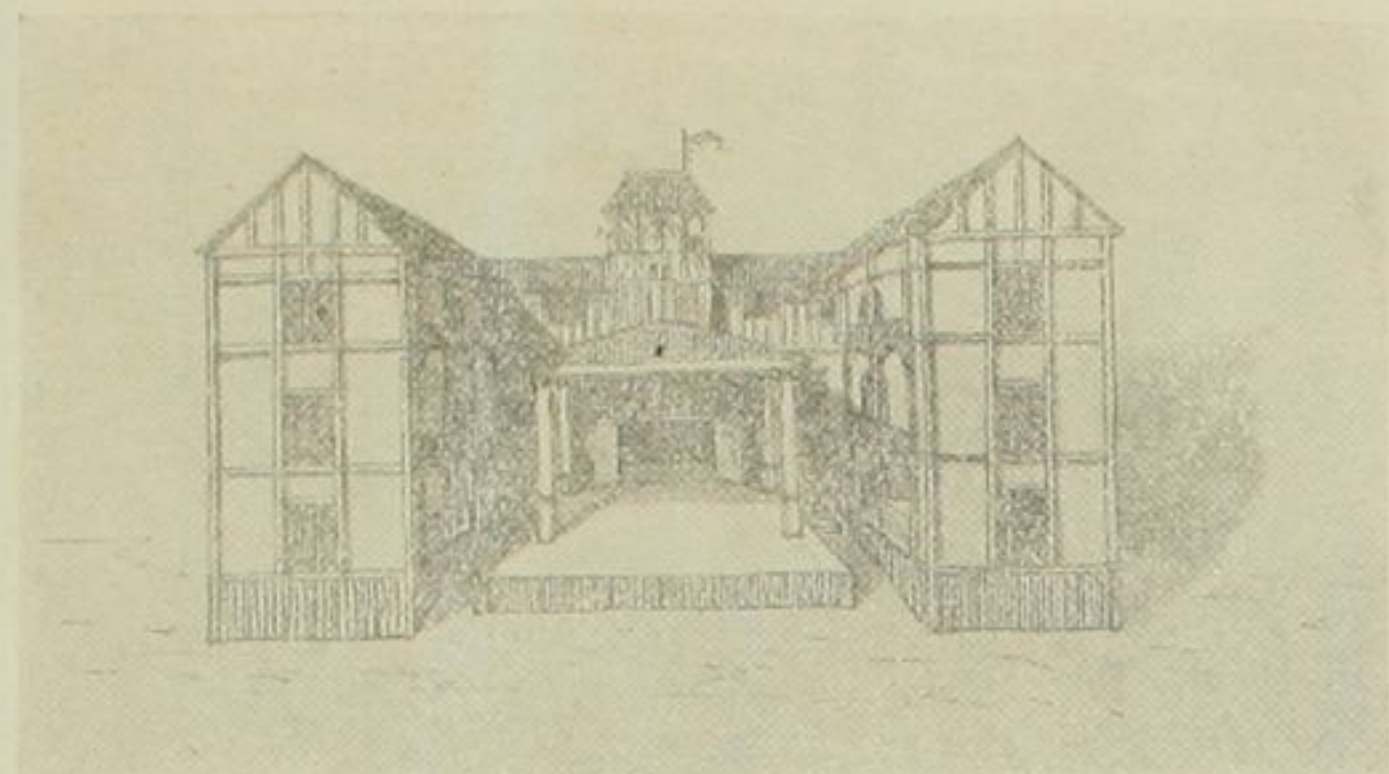
外に實演舞臺面及俳優の寫眞。繪端書。明治以後の芝居番附、筋書。演劇雜誌。新聞切抜帳。模型舞臺。ペーヂェント及び兒童劇の假面、小道具、衣裳、背景幕等。

五、演劇博物館は、右に述べたやうな性質、内容の物として建設されるのですから、文壇、劇壇と限らず、坪内博士の「人と藝術」に理解を持ち、此記念事業を贊助せられる方々の御寄附又は御寄託は悦んでお受けします。さうして、お互ひに自分の演劇博物館として愛撫し成長せしめ、内容の充實を計り、使命を全うしたいと存じます。

然し、内容が内容ですから、御寄付は金額と限りません。劇に關して多少なりとも參考となる

べき物品、例へば劇は勿論、舞樂、能、神樂、舞踊等に關する圖畫、書籍、模造品、諸種の記録、臺本、書拔きの類、又は衣裳、鬘、假面、諸種の器具類、或は名優、名士の遺墨、遺品等に至るまで、よしそれが如何なる斷簡零墨であつても、わが博物館に取つては貴重な材料であります。さういふ物品をも各方面より豊富に御寄贈又は御寄託あらん事を切望いたします。

昭和二年六月



演劇博物館圖

○御寄附の金額には制限を附しません。

○御寄附金は「即時拂」、「三回拂」の二種といたし、「三回拂」は今年七月、十二月及び昭和三年五月に分割御拂込を願ひます。

○物品の御寄贈又は御寄託の場合は、荷造り費、運賃等は當方で負擔致します。

○御申込並に拂込は左記宛に願ひます。

東京牛込早稻田大隈會館内

坪内博士
記念
演劇博物館設立事務所

振替東京

番

○左の圖書本の文行を、校して繕ふ

一 翰木齋論

字

一冊

一 玉堂禁經

此二書、卷菱湖の寫本、翰木齋と傳ふ、書法類

釋の標題も弘化年間刊行したるもの

今世に流布す、二書共に秋原秋菴の校

訂、真奈註を託、卷首に邊田綾瀬、朝川

素庵の序あり、卷尾に大口山亭の跋

あり、皆る秋菴門下の人の揮毫、是れ、係る

本文、跋下、秋菴白身あり、へき、歟

本、得る、字本も、その稿本も、と、原本の

書、の、菱湖の、出、似、だ、ん、ご、つ、人、の、書、房、を、ま、へ
く、之、ん、に、加、へ、る、多、く、の、姓、黃、と、附、録、を、
清、秋、原、に、お、く、墨、梅、の、額、者、を、以、て、判、す
べし、刻、本、に、對、照、す、る、ま、は、確、切、な、事、也、此、方
は、秋、原、の、寫、本、を、託、し、て、完、了、と、謂、ふ
を、得、ん、じ

史、考、幼、時、秋、原、に、就、し、書、を、ま、あ、ふ、家、と
縁、が、あ、り、余、此、書、の、此、の、様、子、校、本、の、後、に、
還、觀、紙、料、と、ふ、ん、を、審、み、繕、ひ、得、て、
裝、釘、を、改、め、家、に、納、す、と、い、ふ

六月五日記

○明治十年御巡幸の供奉官員を坂分
に得たり

表者

御巡幸御行列御供官員附

とあり半紙等に折り帖面形のしるしを首部
二頁に亘り御行列の図あり、其下に次々
御巡幸の馬車あり、隨員騎馬あり、
供奉官員のまゝあり

太政大臣 右大臣 岩倉公具視

皇太后 冬 議 大隈重信

皇太子 〃 井上馨

内務省

少輔 林友幸

大書記長 品川洋次郎

敬告視察 大書記長 川路利良

陸軍省 少輔 大山久

宮内省 卿 徳大寺實則

大輔 杉本七郎

一等侍從 佐々木高久

土方元

一等侍醫 伊東方成

御用掛 山本善吉

右の外微官を以て知名の人は若干あり

大政官に少輔記及 谷本林其男

内務権少輔記及 西村捨三

警視少輔記及 大淵曲武

日 高崎親章

大花者権少輔記及 依伯惟忠其男

陸軍者 少佐 比志島義輝

空内者 大士記及 香川敬三

山岡誠太郎

二等侍補 高崎正久

三等侍補 末田角作

大官より俸額を以て岩倉公月給六万山大隈井

上の五回 依尾に道中 休泊附と日程あり

八月廿日 板橋を越し 十一月八日 農幸

の日取也

此方の流十二年八月廿日 節島みち雄坂

井友中より出陣せしむる、今又入ら

る也

○孝忠義塾の幹部 北條 早稲田大等、兄子

の流るは、子リ等といふ末等のことなり、兄子の故

言い、早稲田大の行政事務、孫の實地を以て也

林毅陸軍少佐の威名、上下を統流する勢いあり

勢、流脈の状あり、こと、此年の夏、以て

キ、一、高き、が、由、未、考、を、考、く、二、お、生、二、月

尚志納氣を踊り、全費七八分、毎月志納といふ
と解脫に由り、ききま、授け、し、来、夜、行、凶、を、
困難、殊、私、各、に、柱、を、祀、り、と、す、其、又、應、の、
お、岸、の、火、祝、と、い、ふ、き、ま、あ、る、と、い、ふ、早、大、に、柱、を、
深、く、思、を、及、せ、り、
〇老年十月うねを、
後任の候補ハ塩津四一二人の内、
一と山滑と挙ぐる、こと困難あり、
財政を今後料理する上、
可きものも塩津に、
塩津、
知れども人氣、
〇

已志を得、
由、
一、
早、
六、

〇早稲田の大隈、
七、
神、
ハ、
一、

を合祀し或る季の節に祭典を行ふ可し。滋長余に
祠名を問ふ。余招魂殿の三字を撰ぶ。神中二内
出べきに祀るべき故人の氏名没年を撰ぶ。神子録
とす。此卷子ハ輪廓に相高の云直を施し
鳥の子紙を以つて作り充分鄭重のよきなり。忌
或ハ厨子とす。入ル。巻舒自在の二風を以て忌
日に故人の氏名を厨子の外面より見得るやう
するも可なり。大隈辰記念講堂成るの日を
以つて此招魂殿に祭典を行ふ。陽宅祭典に
ハ滋長祭文と撰ぶ。次ハ式とす。す。取
神官傍侶を招くを要せざる也。六月六日記
○余が才二の地蔵堂既ニ印刷所ニ回付しある由

似も進んである。其の書りぬが定まりぬ。前のと
似通つた名を以て撰ぶ。雲のもあつた。其の法し
て重ぬる。或ハ遺書とす。今ハ
べきやとも思つた。其の書りぬと云ひ。其の
のハ免角考案や。其の法し。其の法し。
是非後春賦とす。其の法し。其の法し。
従ふこと。今ハ其の法し。其の法し。
より百頁ぬる。其の法し。其の法し。
の書りぬ。其の法し。其の法し。
つたが。其の法し。其の法し。
價ハ自分の主義もある。其の法し。其の法し。
同の法し。其の法し。其の法し。

行の折柄、統教の多量を標準として、價を定め、
澤々内かぬ。 六月六日

○大量出版、一回本、大廣告、よんが不景氣の世の中
び一世を敬うかした。手元の食糧を書店の運動して
誰の七段も危ぶまらぬ、いよのよ、印刷社、前金
び無ん、印刷と多し、廣く社、前金、無ん、
應せ、紙屋も、日、扱ひある。いん、危ぶまらぬ
てある、よ、無ん、志、いよ、廣く、偉力、或、
愚か、中、い、或、十、萬の、讀者を、立、得、比、よ、か、
2、一冊、千、五、百、一、回、とい、い、未、曾、有、の、廉、價、ひ、
か、ま、く、の、教、が、出、ん、ば、い、ん、び、五、十、百、教、が、出、ん、ぬ、
も、あ、い、資、を、さ、く、續、け、が、秘、室、の、巻、教、を、出

し得、こ、も、あ、ら、う、か、果、し、も、資、金、が、つ、く、か、
強、約、金、を、資、金、に、充、つ、か、ら、初、め、金、拂、り、出、来、
よ、う、か、強、約、金、が、老、目、く、ん、ば、い、う、て、あ、ら、う、か、新、奇、
を、表、し、よ、後、者、の、一、回、の、廣、く、煽、ん、せ、つ、て、七、
の、か、二、冊、目、三、冊、目、五、冊、目、を、あ、ら、う、と、ド、ツ、カ、リ、減、り、
り、あ、ら、う、の、従、来、の、例、に、比、ぶ、の、大、量、出、版、ひ、も、
實、一、冊、毎、に、或、万、の、漸、減、と、い、い、ん、て、あ、ら、う、ん、
こ、と、に、後、者、の、續、刊、が、出、来、ら、う、か、今、う、る、教、の、
々、ん、て、あ、る。志、か、し、よ、の、思、い、ん、や、い、う、あ、ら、う、
其、の、内、容、は、杜、撰、極、ま、ら、う、の、か、あ、ら、う、と、い、
ハ、斬、り、措、け、問、い、ず、と、い、ん、此、の、破、天、荒、の、試、
ハ、の、教、訓、を、述、つ、て、あ、る、こ、の、確、か、ひ、あ、る。

六日ありき

○長安の羽賀席よりくし良寛の扇面書画を複製
物としをもて定めて其の扇面より公盆物の圓き
ものにて造りしもの和紙を剥ぎ取らばおんごたの如し

此の複製を
いふおま

新刊を
真を亂

る程より

六月六日
記

良寛上人御歌を賛

きみうたへわれたちまはむぬは

たまのこよひのつきにいねらるへしや

長安市立
五藏院
少芳庵
三郎

十二

○高田新報社より一冊洋装本を寄せて来る
本年の大雷を記念する以ての印刷物なり
書

昭和大雪海

一冊

といふ高橋義興の編纂あり係る来當有の
大雪に關する諸齋道と総覽を往々
を一般に播くは、興味あるべき也
味ある記述をも欠くは遺憾なり
の一記新報社より寄せて可也

○此の六月七日に東京にて
たの一巻を録す

彩雲を花古良目録

今一冊

御保存ならば、一通御割愛を願ひたい、—といふ次第だ。雲華は讀み了つて、その心情を酌み、丁度今來たばかりのそれが、先方の注文通り、詩が書込んであつたので、早速返書を認めた。『賴山陽の書翰の事御申越、幸ひ近日參り候書狀あり、詩入有之候間進上申候。二月五日、大舍』とある。

生前すでに此の如しだ。その歿後には一倍世人に珍重された。それを思ひ合はすべきは、或人が書畫屋から持込んで來たらしい山陽の書翰二通を、篠崎小竹に見てもらひ、その眞贋と價格とを問合はせたその返書に、『皆眞跡に候。前年は銀一兩位なれども、只今は一通にて貳朱より銀三兩位なるべく候。早々。三月二日。弼。未嘯兄。』

* * * * *

運命洗禮

一切平等

寄其因一

似凡非凡

公坐秘卷

柔而欲剛

似我非我

夫若皆在

終身不飽

苦樂難判

叫死苦之有
泣之悲也

似穢不穢

潔癖者好

瘦骨是快

無忍性

利邪祿者

淫思長久

淫行不伴

夫巽悲哀

愛人之子

倫理的慣習

秋波是淫

播吻亦淫

墮字接吻

大慾天慾

男色女色

腋窩似陰

腐陰穢

陰毛爪趣

卵巢罨丸

不要手術

愛女膜

陰是樂淵

陰是禍府

女仰男俯

德力

女乃用股

男乃用股

鴛鴦抱擁

守一足貞

排他是操

力股司操

男然女受

男攻女從

豪華摩陽

淑女撫陰

陽怒陰解

情之所鍾

愛沒百醜

愛沒羞恥

野飲皆色

酒飲姪齋

愛夏無束縛

美夏共用拈座

婦非石酸

七非石酸

然去垢具

自浸不妨

持戒一法

女子肉量

俗謂色肉

倒寫狂態

巨勢探進

春臺私語

誤書便方

假談飛

鮮血月出

女子不驚

為產兒者
義理徹底

の東京の一新多が日本八国票の投票を養つた結果
 が漸やく紙上を現はれ、此の投票票は六割のよむ
 あつた八国票の金額は海岸沿邊の山岳澤布
 漢方海川、香原泥湖、各類十国票乃至
 八十国票を投票数でも進出、先を更へて
 陸海「しん」をあることあるつてある、投票係
 数が九千三百萬四千八百七十七百七十三
 票の大数の上つてある、日本の人口も多し所か
 ら考へると、存在せざる多数の委託の名に投票
 したことが知れ、端考を投票用紙に充てたの
 であるから、端考の原價は三十五萬圓に上つ
 てもある、通信者の収入は先を更へて、地方郵

便向も風の急地不在の地合を別ひあつた
 事、さうして、宣傳の視模も大きくなる。

- 海岸 三萬九千四
- 漫 三萬四千七
- 山岳 三萬三千八
- 澤布 三萬六千二
- 漢口 三萬三千二
- 河川 二萬三千三
- 平原 一萬七千五
- 沼湖 七千一
- 合計 一萬四千七百七十一

こゝに極るを北と海岸と山岳の口数が亦多
多い、日本を海を環らしてあるから海岸
の凡そ果てまであるの、あつた山岳も亦多い
から口数も多い筈である、平原沼湖河川が割
合も少くないから投票も多しとおりのつから現
れ、兎に角八球とも兎に角へきこよのまゝと極
難しであるといふよりおろし、此れ南極一丸の
が先ずす其分敷巾の冠兎であるから至やと
其出地への冷熱に極るこゝのむあるから一概に中
一と申すは違ひはくしといふも、其統らてる口
七あるは亦多し、例へば花巻沼のこのとき風
果地があるが僻境であるから至極の

とあるから、詮詰り結果北極が切つて亦一と推
せらるゝも知るべき、兎に角凡そ果て日稀あり
月旦と云ふを失りぬ、たゞ新報の切ぬきを収
めおく

二月十日記

いんば橋を足と海岸と山並みの数か家も

景紹介

各景第十位まで

山岳

品 一名雲仙岳と
谷村六助の彦山権現がある、昔は三千六百坪、今は旅館その他僅に二百余戸
阿蘇山 熊本縣阿蘇郡の標高四千四百
中央に聳え本邦屈指の活火山、熊本市より東十二里、黒川村字坊中から一里三十二町で山頂に達する

中央線淺川驛から三十町にして山麓に達する、標高千九百八十五尺山上に古刹聖王院がある、天平十六年行基僧正の草創にかゝる、關入州を一眸の下にあつむる眺望比なし、淺川山麓間は乗合自動車あり、最近ケーブルカーの開通によりながらにして山頂に達する
赤城山 群馬縣勢多郡の北方に聳え、高さ六千二百四十七尺、妙義、榛名と併せて上毛の三山と稱す、前橋市から約六里、山頂に大沼ありその水清くして鏡の如く湖畔に國定忠次で有名な赤城神社がある、遙に富士、八ヶ岳、淺間等を望み壯觀、山上旅館あり
大台ヶ原山 大和國吉野郡と伊勢國多摩郡とに跨がり標高五千七百十六尺、吉野よりすれ

惠那峽

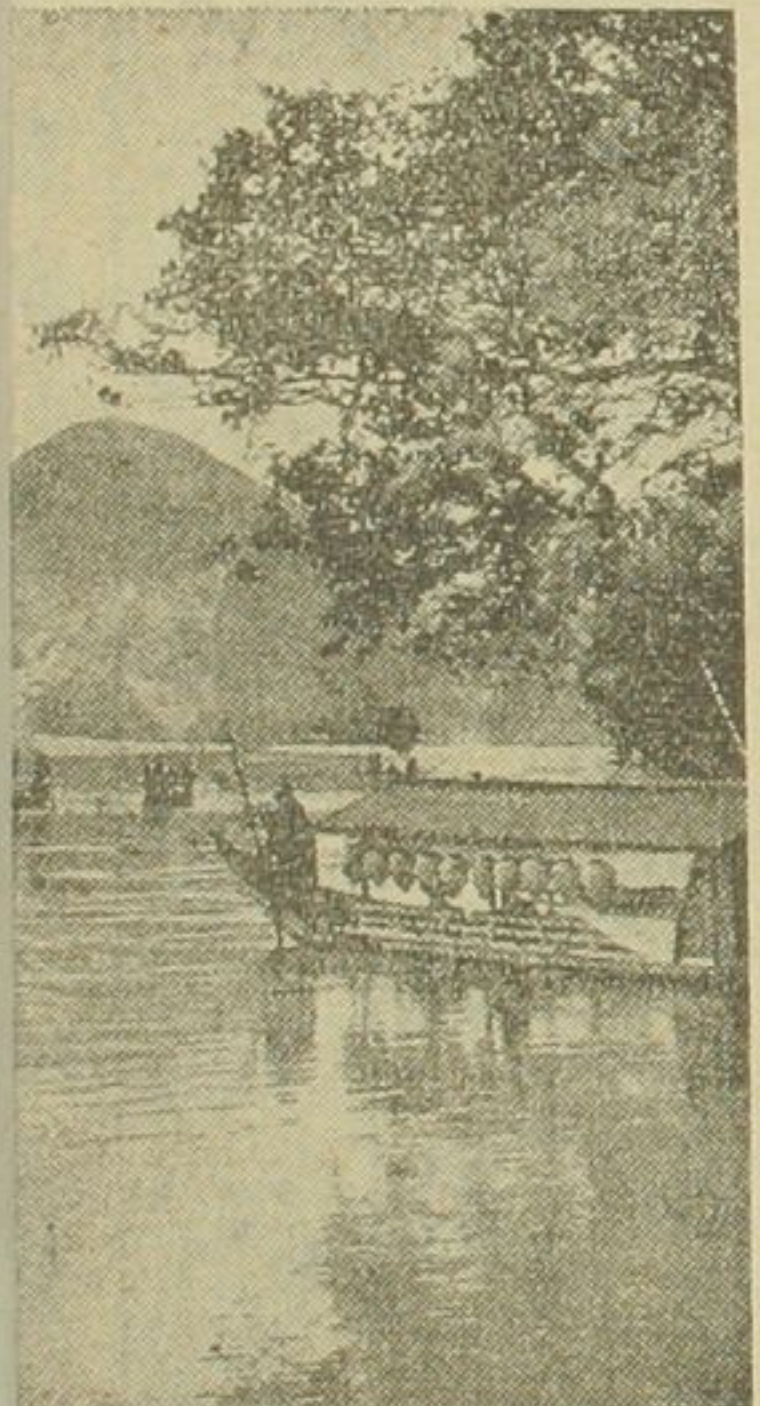
木曾川の流域三里十五町にわたる峽谷、大同電力ダムの築造によつて俄に一大湖となり紺碧の水にうつる兩岸の景観南國そのまゝ
中央線中津川驛で下車七町、船を備へて水上に浮べば屏風岩、月待ヶ岡、品の字岩などの奇石怪石、さながら巨人の如く睥睨

祖谷溪

徳島縣美馬郡の深山幽谷、兩岸けづるが如き祖谷川の溪流に架けられた蔓橋は日本三危橋の一つとして有名、今は木橋が出来て昔の面影もなし
汽車は徳島縣河波池田驛で下車東八里十町、一字村までの七里は車を通す

十和田湖

青森縣秋田の兩縣にまたがり周囲十六里、清澄鏡の如き湖面に峰巒の影を寫して一帯一帯ながら一幅の活畫の如く紅葉時の美観が一番の見もの
一東北本線古間木で乗換へて三本木驛から奥入瀬の溪流を湖り湖畔子の口に達する沿道は最も景勝に富む、三本木より焼山迄自動車、の便あり萬湯泉に一浴するも可、黒石驛からは板留まで馬車あり、あとは徒歩七里余、秋田縣からは毛馬内驛より大湯温泉を経て發荷峠を越ゆる順路あり、峠下まで自動車あと廿丁は急坂、小坂驛から鉛山峠越は學生の徒歩旅行によし、湖畔にはホテル旅館等々
六道湖 鳥取縣の名勝、



長良川【鶴岡の光景】

八十景紹介

各景第十位まで

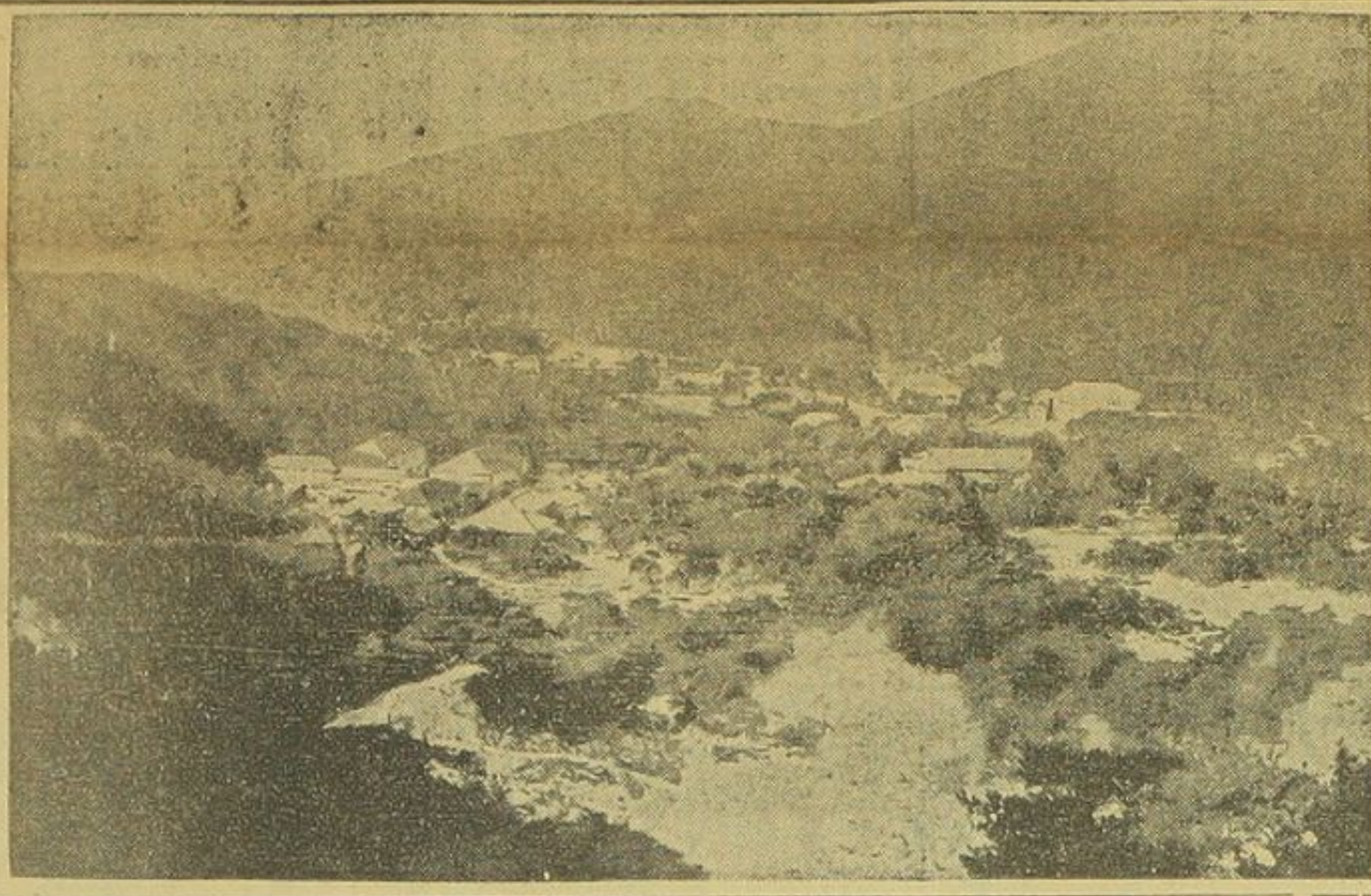
山岳

温泉岳 一名雲谷村六助の登山道がある。昔は眺望天下第一品。...

溪谷

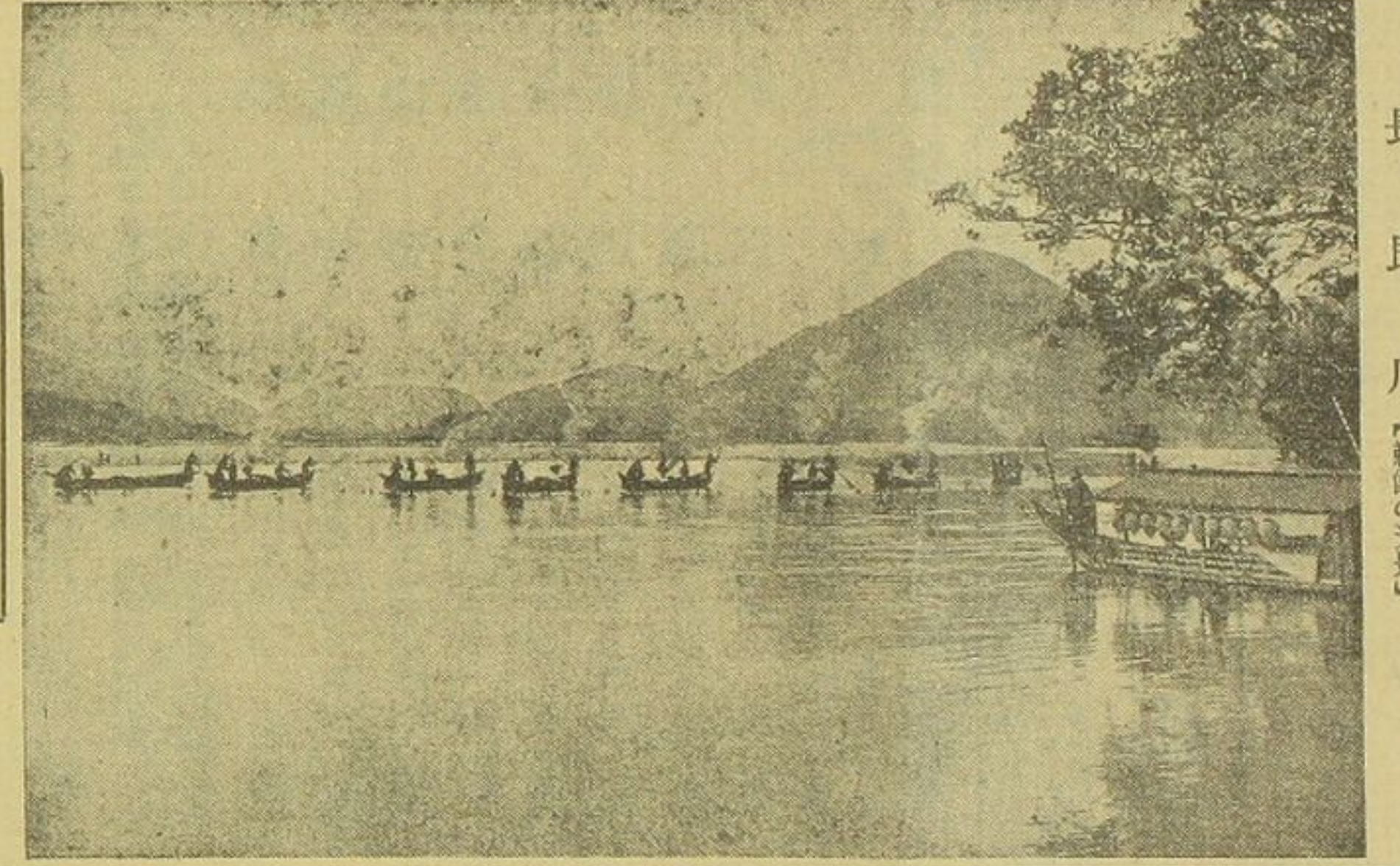
天龍峽 溪谷美の随一。四十里の天龍下り。...

英彦山 高尾山 阿蘇山 大台ヶ原山 雪彦山 長瀨 帝釋峽 久住高原 八ヶ岳平原 飯田高原 兔野原 秋吉台 一碧湖 洞爺湖



温泉岳の全景

恵那峽 木曾川の流域三十五町にわたる峽谷。...



長良川 [鶴岡の光景]

日田盆地 大分県日田町の東。田原の中。...

富士五湖 富士山麓の雄大な湖群。...

洞爺湖 湖岸からそよ風吹く。...

(第十回へ続く)

40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

日本新八景選定総投票一覽表

推薦された景勝千四百七十二

日本新八景および新百景選定候補地推薦投票の結果は各景第一位より第十位までの五日の紙上に、第十一位以下を六日の紙上にそれぞれ発表しましたが更に投票一覽表をここに発表し、しかしてその各景の口数は海岸三百九十四、温泉四百四十七、山岳三百廿八、瀑布百六十二、溪谷百三十二、河川百二十三、平原百十五、湖沼七十一、合計一千四百七十二の多きに達してをります。海岸と山岳の口数の多いのは四方面で、山岳に重なるが國の地勢上自然の賜でありませう、これと反対に平原と湖沼とが少いのは國土狭小なわが國においてもとより當然なことで、河川もまた必ずしも口数において多きをかぞへてゐないけれどもわが國における屈指の河川だけはこれに類してゐることは申すまでもありません、なほ左の一覽表の外支武河、秋芳河、龍洞河に對して支武河と龍洞河は各一票づつ、秋芳河は五百六十七票の投票がありましたけれどもこれは本誌日本新八景投票問答中に掲げておいたとほり「八景の何れにも分類し難き奇勝」として除外します、たゞし審査委員は参考材料として提出いたしました、これを要するにこの投票一覽表は或意味において日本内地の風景一覽表でもあり地勢を文字で表現したところの興味深いものでもあります、終りに、本誌は今回の選挙に賛意を寄せられ、かゝる多数の推薦はがきをいかにも多謝する所なる景勝地を有る無名となく本社に寄せられた地方有志並に保護の好意と、これを取扱して事務煩雜を感した地方郵便局の勞を多とするものであります、審査委員は十一月一日午後から開催します。

この一覽表を作成するに當り全候補地の投票数を更に検査委員の手に移して再検査する一方他の部に混入した散票も整理しました結果二三票數並に順位に訂正すべきものあるを發見しましたのであらためてこの一覽表によつて訂正致しました。

山岳

- 温泉岳 (長野) 六四〇
- 御嶽 (長野) 五七〇
- 清澄山 (千葉) 四五六
- 信貴山 (奈良) 四四一
- 英彦山 (福井) 三九九
- 阿蘇山 (熊本) 三九七
- 高尾山 (東京) 三九七
- 赤城山 (群馬) 三九七
- 大台原山 (奈良) 三九七
- 雪彦山 (兵庫) 三九七
- 三ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 四ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 五ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 六ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 七ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 八ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 九ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十一ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十二ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十三ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十四ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十五ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十六ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十七ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十八ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 十九ノ宮山 (和歌山) 三九七
- 二十ノ宮山 (和歌山) 三九七

溪谷

- 天龍峽 (長野) 三二七
- 御嶽昇仙峽 (山梨) 二九二
- 瀨八丁 (和歌山) 二九二
- 長瀨 (和歌山) 二九二
- 帝釋峽 (山梨) 二九二
- 長門峽 (山口) 二九二
- 三段峽 (山梨) 二九二
- 黒部峽谷 (富山) 二九二
- 惠那峽 (岐阜) 二九二
- 祖谷溪 (徳島) 二九二

各景投票内譯

- 海岸 三二四
- 温泉 一四一
- 山岳 一五〇
- 瀑布 一三〇
- 溪谷 一四〇
- 平原 一三〇
- 湖沼 一三〇
- 河川 一三〇
- 総計 九三、四八一、七三三票

温泉

- 花巻温泉 (岩手) 二、〇八八
- 熱海温泉 (静岡) 九〇七
- 山中温泉 (石川) 二、〇八八
- 和倉温泉 (石川) 七、〇三三
- 三朝温泉 (鳥取) 五、〇三三
- 芦原温泉 (井ノ口) 五、〇三三

海岸

- 室戸岬 (高知) 二、〇八八
- 浦島 (徳島) 二、〇八八
- 室戸岬 (高知) 二、〇八八
- 浦島 (徳島) 二、〇八八

河川

- 室戸岬 (高知) 二、〇八八
- 浦島 (徳島) 二、〇八八
- 室戸岬 (高知) 二、〇八八
- 浦島 (徳島) 二、〇八八

別府温泉

- 別府温泉 (大分) 四、八四七

或る風景觀

「勝つて、雨に奇なれば、山に出る。
勝つて、雨に奇なれば、山に出る。
勝つて、雨に奇なれば、山に出る。」

海岸

- 室戸岬(和歌山) 二六八、八九二
鏡ヶ浦(和歌山) 一五九、四九七
唐津浦(和歌山) 一五九、三九五
赤穂御崎(兵) 一五五、二〇九
千本松原(和歌山) 一四七、七二二
室積灣(和歌山) 一三〇、七三三
御濱鬼ヶ城(和歌山) 一〇八、七四三
蒲郡海岸(和歌山) 一〇七、三三三
青海島(和歌山) 一〇三、四六八

瀑布

- 袋田瀧(和歌山) 四〇六、八八八
赤目四十八瀧(和歌山) 四三六、〇五三
神庭瀧(和歌山) 三三六、五三三
箕面瀧(和歌山) 三三〇、九〇一
養老瀧(和歌山) 三〇三、六五五
魚住瀧(和歌山) 二九〇、〇二二
富士白糸瀧(和歌山) 二六二、一八三
王餘魚瀧(和歌山) 二四四、一八一
華嚴瀧(和歌山) 一八〇、九四〇
木曾田立瀧(和歌山) 九五、三三八

平原

- 日田盆地(和歌山) 六九八、九四九
姥捨(和歌山) 二四六、三三四
八ヶ岳平原(和歌山) 一七五、一七三
久住高原(和歌山) 一三九、五五二
符勝平原(和歌山) 九〇、二五五
日本平(和歌山) 六九四、八五五
飯田高原(和歌山) 六〇、九五五
兔野原(和歌山) 五五、五二二
秋吉台(和歌山) 五五、〇六五

湖沼

- 富士五湖(和歌山) 一、三三、八九七
十和田湖(和歌山) 八七、二四八
宍道湖(和歌山) 六八、〇一八
琵琶湖(和歌山) 五九、五三三
加茂湖(和歌山) 二五、一五四
田澤湖(和歌山) 一六八、八七一
一碧湖(和歌山) 一、一八、〇一三
洞爺湖(和歌山) 一、一三、五二二

河川

- 長良川(和歌山) 九八、三三三
球磨川(和歌山) 九三、七三三
木曾川(和歌山) 四一、四七六
保津川(和歌山) 四〇、九四三
利根川(和歌山) 三〇、六〇一
古座川(和歌山) 三三、〇〇四
宇治川(和歌山) 一、一五、五九一
阿賀の川(和歌山) 一、一〇、六三三
川上川(和歌山) 五〇、二六六
江川(和歌山) 二、八、一〇三

黒部峡谷

八三、三三九
七六、六八七
惠那峽(和歌山)
祖谷溪(和歌山)
七三、七七八

和倉温泉

五七〇、三五六
三朝温泉(和歌山)
芦原温泉(和歌山)
五五、六、一八八

ホテル等の設備
客多し
平(いさ)はや
狭へ小濱或は島
温泉地まで自
標高五千五百七十七尺、その火口
腹は世界一、直徑七里、短徑四里
で五萬の村民が居住する噴煙の棲
槍雄大なるは火山中にも稀に見る
もの

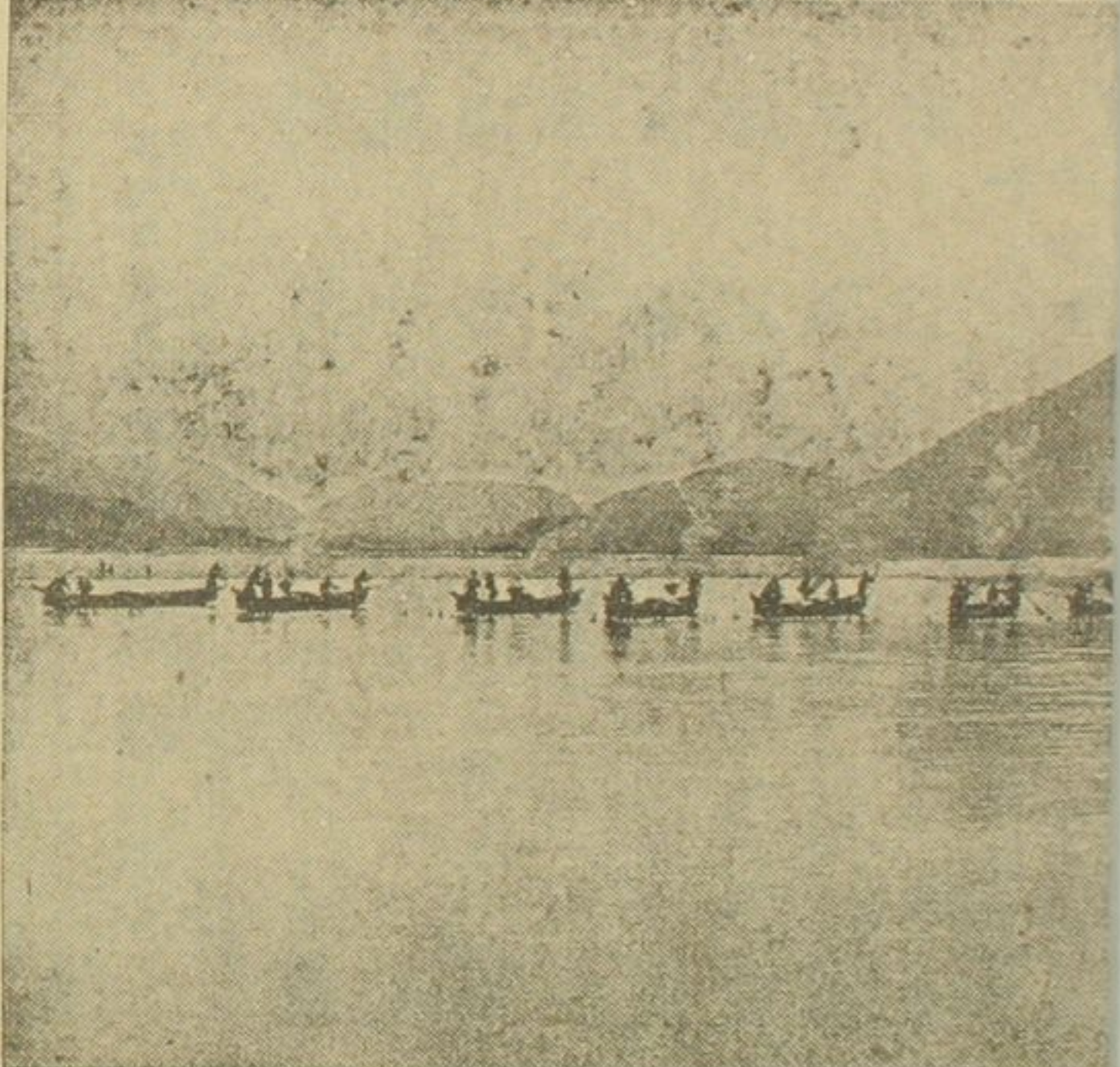
高尾山 東京府下の名山
千八百八十五尺

溪谷

天龍峽 孫谷美
の隨一
四十里の天龍下りは壯快極まりな
し、かつて英國コンノート殿下の
御來遊によりその名海外まで轟
く、中央線辰野駅から伊那電車で
四十一マイルを飯田へ、そこから
時又へ二里(自動車あり)時又から
舟、二十五里の長江を十時間で遠
州鹿島へ下る痛快さ、たゞし舟賃
百五十圓、十五人まで乗れる、豫
め申し込んでおかないとない

井から支流北上川を船をひかせて
さかのぼること三里余、玉置口か
ら兩岸にはかに迫つて、河水深く
よどみ、その色藍の如し、水にの
ぞむ岸壁直として千仞、支那の赤
壁そのまゝの絶景、交通不便だが
熊野本宮参拜かたぐいの見物客で
賑ふ

長瀨 秩父赤壁として有
名、荒川の清流に洗はる、奇巖怪
石、一岸は高く聳え、一岸は累々
としてわたかまる、所々に翠松、



平原

日田盆地 = 大分縣日田とし人煙稀薄で付近數十里人家な

琵琶湖 日本第一の大湖
風光明媚、しかも湖畔いたる處名
所舊跡の歴覽、都人士の遊覽す
る者四時に絶えず、大津より湖
一周汽船の便あり、多景島、竹生
島、唐崎、近江舞子等の名勝を一巡
す、大津より電車で石山に遊ぶも
よし、明智左馬之助の湖水渡り
有名な坂本から比叡登山を試みる
も痛快、たゞ京都からはケーブル
カーで楽々とのほれる。

大沼 天空をつんぎく胸ヶ
岳の山裾に清冽瑠璃の如き水をた
へて一百廿八の青嶽を浮ぶ、繪
より見れば、湖、引込八里、中

國醇會の小會

六月小會は「船」といふ小家庭に、會員十五人を載せ、隅田川と荒川放水路へ溯り、横堀を曳き込みよしきり鳴く初夏気分から江戸情調をも味ひ、日本橋産雜名物團子をおまけにわざく／＼十葉から取寄せた刺汁よ、會員を豊満させん幹事等、苦心も、朝来の降雨が水泡を流して一まつたことは遺憾此上なく七月は捲上重来の雨聲を企てるが苦。船はお流氷となつて、鶯溪の國柱會鶴の間へ一同集り、漫談の賑ひ、永見夏江氏の印度珍話から長崎新且又諏訪神社の英文おみくじと一同へ頒たれたは時を取つての逸興であつた。鳥谷幡山氏の支那の廬山訪問談、函壇へ回鋒痛快を極め、宇都宮日綱師の娵妙、國寺蘇鉄の文字「蘇鉄」は多分、院山佛心院日現上人の命名ならんとの逸話并に香取秀真氏の銅鐸の解説等あつて、最後は高須梅溪氏が緑雨、獨歩紅葉、眉山、美妙等の文学生活苦の實談講演あり、船中の料理は刺汁を何杯でも喰へ放題とあつて、且唐り、且味ひ、午後五時解散す。当日の出席會員香取秀真、宇都宮日綱、鳥谷幡山、永見夏江、本田穆堂、高須梅溪諸氏、外に田中智学翁代芳谷氏と篠田河野、斎藤三幹事、會員齋崎英明氏からは「性来船と雷は大嫌ひゆゑ不参」とうけり、は、斎藤幹事から披露があつた一喫。

○六月十日 文行堂に於て得る所の圖書
左

一 ^{方山子} 好志者集

言本 十二冊

方山子の集也 宋漱煥州の
卷之二 冊塔州自字、標記
終州 草子 目録 方山子集注
六 皆饒州 草子 此の土屋
海 卷之三 美 志中 出 各
冊 宋漱氏の花記あり、珠花す
は、價七十四

一 方子道徳行記 尚十行 一幅

其定持童の末 古之善為童
及江海為百子童の末 此の
地 尚州 汜 汜 汜 汜 汜
二 金 卷三 或、振本が未だ定か
る

巻三 友 新 由 之 の 誤 修 一 卷
を 貼 す

唐人の業述 之 在 邦 人 之 事 亦 有
の 中 期 を 示 して 示 して

葛西因是 夫 在 邦 人 之 事 亦 有

其況今の志子の名章に蓋し
古もあらず後人の杜撰ならずと
いへるか此書章と分りませ
蓋古の面目を失ひたるもの
らう因是を以て觀せしめは
必る舊の授書を以て爲す
を以てせん 新室田之談

一上杉倭信文書

一通

天正十二年七月廿四日付

里川左馬頭宛

文目朱印を捺す

文云

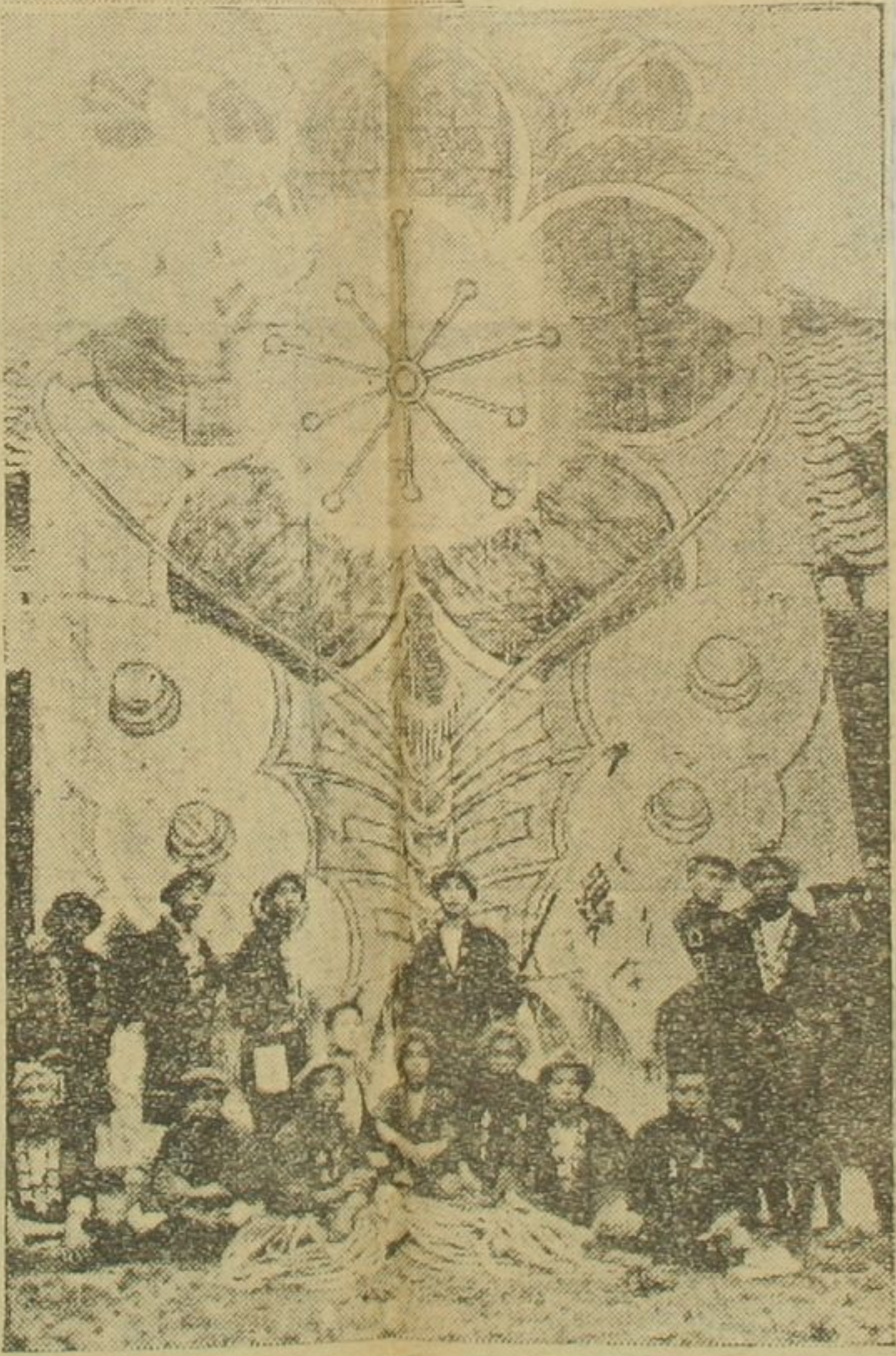
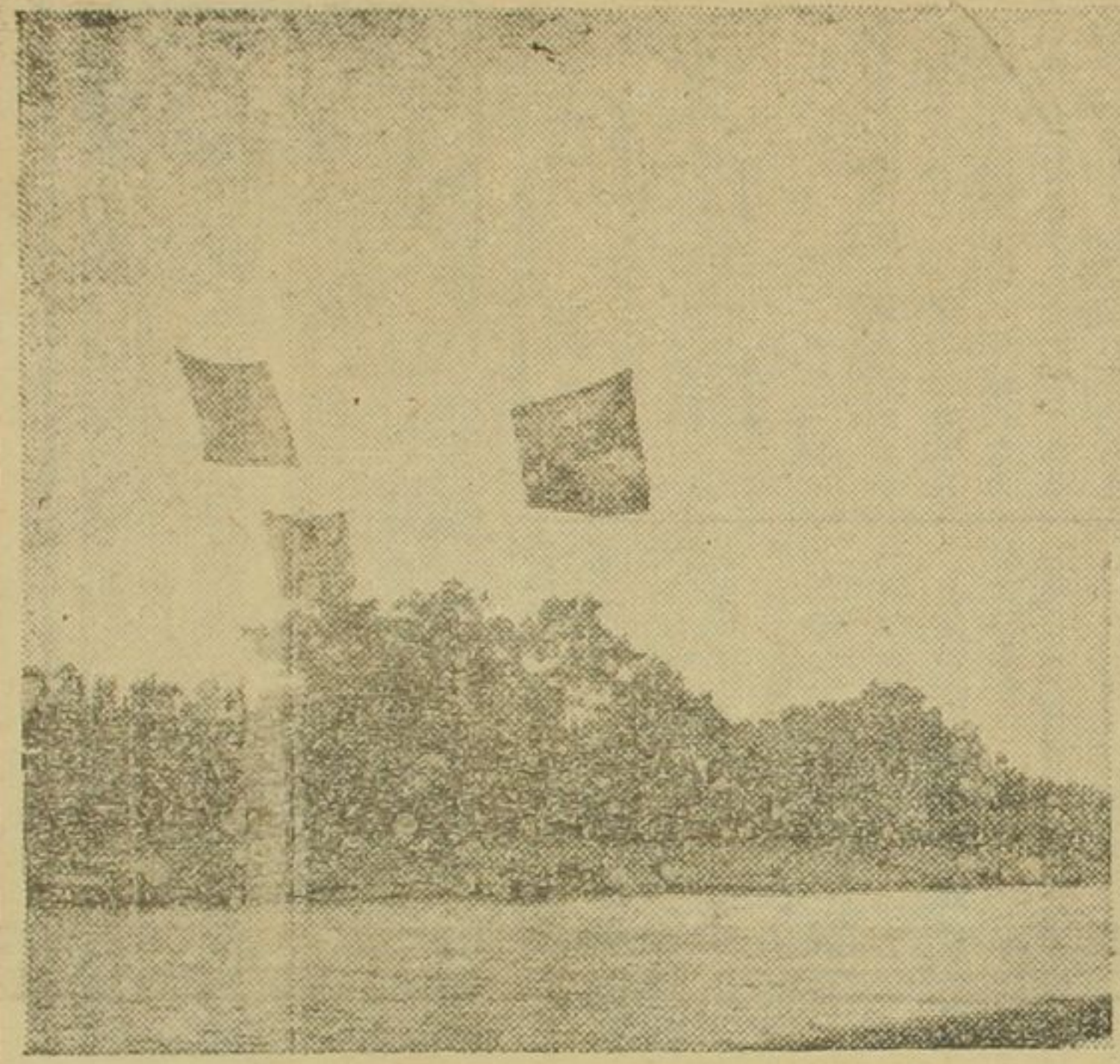
任佗言え古栗生村三奈村
郡司可為不入者也仍之由件
信言の文書に從てあゆむ倭信
の文書稀く此卷とす也

一貞享武鑑

招令殿

一冊

○掌頭とす郷圃の所を紙に白紙所の風合
戦の記事か載つるおる合戦の記の所
ひは吾家の御名とすかすかとあるは



六月三日の縁

や磨る日を望まふことよろう、町の町娘とさうし
おふか、此記もする儀の祈しの如めとある事案
も二三あるから多量に収めし
おく、自分も幼少時代所
ハ政味を感じたものか、今
ふもる行でんとする感事
中も七枚を四五ハハの此
記もすの精ろろろろろ及ハハ

天下にほこる
白根 大風合戦
六月十二日より
向ふ一週間

西濃郡白根町の「白根の大風」たかも知れない、殊に一部地方に
合戦は我國でも他に多く類似の限られた特殊行事の如きは、その起
因なきはむろにおよんではまた往
由來を尋ねて見るに、舊暦時代に
各派の領地と領地とが、對抗して
のであるから、それ等の事柄も或

居た爲めに生れた男性的の挿話は、兩派民の氣風が、おの／＼異る
の一つである。信濃川の分流中之
口川を挟んで、右岸は白根町で新
發田鎮、左岸が村上鎮の白根村で
此の町と村とが對抗して來たもの
である。
○新發田藩主は白根の脈に深い興
味を持たれて、盛んに披露せられ
たから、一方村上藩でも、必ず
濃縮して争つたものである。従つ
て是等の敵愾心の神話が歴史的下
脈にからんで現今の如き男性的濃
快な行事に至らせたのであると謂
はれてゐるが、脈の歴史に關する古
記録が窺つて居らない點を考察す
れば「脈の白根町」を作つた抑々
の濃縮もさながらお伽噺にでもあ
りさうな兒戲に等しいものであつ

○既に戦争が目的の行事で、必ず
勝負を決すべく作られる大風であ
るから、縦糸に双物をつけるとか
又は硝子屏を張り込む等の小細工
をして勝負を争ふべく餘りに脈も
糸も總てが大規模すぎるのである
○十二坪又は十五坪の大きさを持
つ大風の脈であるから、どこ迄
も武士道の正攻法で兩軍共、微妙
なる脈の操縦に臨場應變の懸け引
をなし、恰も互に名乗を上げて一
騎打の花々しい雌雄を決する古武

七に似てゐるのである。
 ◇昔の御旗の節句であつたが、太陽に改まつてからは、地方の田植時期を考慮して中層節句の一ヶ月遅れ、即ち六月五日より約十日遅れ、習慣であつたが本年は旗合協会で白根村の田植の遅れのため六月十二日より一週間の合戦を開催することに變更決定した。中之川の流れは大津分水の北、道邊より分れて来て、更に五里北に起つて新津港へ流る。この右岸、東の堤防にそよ市街が白根町、流れの西に遠く磯原の嶺を背嶽に左岸にそよ村が同じ名前の白根村である。
 ◇いよ／＼中層節句の休みが来ると、鬱鬱たる精力を包んで緊張した若者達は、兩岸の堤上へ繰出し、風の呼吸を見計つて順次盛んに飛揚するのである。
 ◇旗の構造は長方形で四間半の三間半の間に、骨となるべき大竹(縦)と孟宗竹(横)を四つ割にして格子をくむ、その隙は縦が八本、横が九本である。これに強靱な伊瀬紙三百八十枚を貼つて各組、定めぬ繪を書き、一本二枚の若者四十八本をつける。

◇親糸は縦で一尋(五尺)約一百廿寸、横徑凡そ一寸三分長さは百尋より百五十尋位、中央の骨に腰大の丸太添へて縛りつける。此骨が筋木と云つて組合つて曳き合ふ時に最も大切の役目をなす。又尾は象纏を切つて一柄づゝ兩端につける。
 ◇旗の構造はこれでほぼ説明したが骨に使用する竹の本と末の紙合せや、骨格の長短、ピン／＼の張り方、尾の懸重等に細隙があつて双方より、おの／＼敵の陣地へ飛込んで、傾き懸る仕組は實に微妙神祕で筆舌のよく説明し得ぬ所である。
 ◇一度この大旗が、敵陣(北)を孕で、ゆらくと飛天せんか、その壯麗は蓋し一度見ぬ人たちの相違をゆるさぬ者で、二里外より遠望すべく、若者は全身の血をかして集集するのである。
 ◎いよ／＼朝の南風が北へ廻ると待ちに待つたる若者達は脚は心草鞋は昔の事現今では靴支度、さては向ふ鎧巻、洋服法被姿に身を固め、懸懸を揚げて、心も空に旗を掲して堤上に懸ける堤上は既に

近郷より集まつた數萬の群衆で臨押しの有様である。
 ◎その中を各組とも自慢の旗を押し立て、數百名の若者が親糸を握り、指揮者の合圖と共に一氣に出す、後より砂塵をあげて地を塵る。大旗は、空を柱として高く天に沖する壯麗は、壯絶絶の限りで、萬の觀衆は皆我を忘れて拍手喝采をする。
 ◎その間又小旗の張り合ひ、懸け合せは此處彼處に行はれ、張組んで川へ落ちるもの、切離されて、空を舞ふもの、千變萬化時は進みて退いて、翻案は皆、恍惚としてこの壯麗によふ須臾で東西の空に空々たる威風を示して、敵機の熱する待ちたる役旗は徐ろにその雄姿を張つて示運變動に取らかり、よりつ、離れつやがて呼吸合して絡み合ふ利那の壯麗さ、觀衆は等しく熱狂して懸旗の聲をあげ天地も崩れんばかりである。
 ◎絡み合つた大旗は、一時は河底深く沈み、骨は折れ、紙は裂けるが、再び兩軍の勇士に見き上げられて川を中央に、親糸との曳き合

が始まる。兩岸數千の曳手は國の旗を上げ死力を盡して曳合ふためさしもの大糸も一方がブツリと切れて茲に始めて勝負が決せられ、勝利を祝ふ歡聲は夕陽の空に響き返して天地に轟く壯麗を呈する。
 ◎夜になつて、凱歌は勝利の祝に、樹の鏡をぬき、敗北組は又、撤土軍來の計畫に肝膽を砕くなど實に悲壯な光景である。併し毎ら戦ひは何處迄も武士道的で、勝負の爲めに若者連中が互に遺恨を持つて暴力沙汰に及ぶ様などは絶対ない。
 ◎特に敵軍の旗を奪取する美風は特別大書する必要がある。絡まずして、戦線たる中之川をこえて敵の陣地におちた場合には、敵はこれを保護して旗をその儘、艦に乗せ相手の陣へ送り返すのであるが、至々古武士の作法を見る様で嬉しく感ずる次第である。
 ◎合戦に加はる大小無数の旗の中に、特に役旗と呼ぶのがある、角力なら幕の内三役にも比較すべき優美なもので、現在では四間半の三間半といふ大型が、軍軍に六組

西軍に四組ある。これを表示すれば左のとほりである。
 ▲東軍(白根町)
 大高源吉 四間半の三間半 一ノ丁
 櫻 四間半の三間半 仙庵小路
 會我五郎 四間半の三間半 横町
 役者 四間半の三間半 五六ノ丁
 鯛 四間半の三間半 魚町
 新 四間半の三間半 能登
 ▲西軍(西白根)
 達 四間半の三間半 達摩組
 上 四間半の三間半 上組
 中 四間半の三間半 中組
 北 四間半の三間半 北若組
 ◎親糸の原料たる麻は、最優等品を選擇し撚方の各人が精魂をこめて、無念無想、恰も神三昧の境地にはいつて、約半歳の日子を費して仕上げる苦心は又驚くべき程で自己の燃つた糸が勝てば、祝酒をあげ、酔れば二三日は床に臥して懸む有様は、名工が双剣をきたへると同様である(關根齋堂)

○葉無性の高田よ峰よ、よの関流を
 書くは、漸やと勸めはこと一切を
 あつたが、漸やと近頃其氣来りたりて
 ボウ／＼口授筆を紙をよめはよめが二
 百枚を脱稿しは、えん／＼の流二十
 年頃、及んひある、何由と相自分か
 半峰の行存、いかに、關係かあ
 り所か、いん／＼と、禱をかくよと
 書好か、回つて来比の、流人て又、
 と、具味本位、又書い、てあるから、信お
 こし、も、流、又、つ、れ、大、休、事、実
 ハ、院、の、あ、る、外、徒、と、考、き、是、と、女、所、も

ある、亦も人みかから言ひ重なるやうな所もあるの
で、二字下ろしして七八ヶ所を補注を附し、
梓君の象山の就むのことが、稿の長いと
他の漢書が、中峰が、その宗時代の英
文に長し、ことごとく、多く人の知るべきことである
から、その注に、講談、語味のある結果、西
洋歴史をも通し、ことごとく補注した。改革派
甚だ、中山、おれ、乗込、人の漢語の、一節、に自
分も、似寄りの、ことごとくある、の、を注した
一月二日、静、室、に、おれ、を、函、山、欲、を、成、へ、れ
た、の、追、憶、も、録、し、た、此、の、昔、の、漢、に、自、分、の、自
伝、も、もの、する、時、の、資料、も、ある、から、記、す、こ

関係ある自家の事、を、遠、慮、ら、ず、挿、入、し、た、六
月十四日

この頃の遺ひ得たる、好、志、齋、全集、の、十二、冊、を、編、纂、す、
種々の印を捺す

天香書院

洗石岩瀨氏回書記

柳巷岩瀨氏回書記

蟻州岩瀨氏回書記

洗石、天香書院、蟻州、皆、岩瀨、の、雅、書、

外、吾、齋、の、雅、書、あり、漢、語、の、書、に、見、ゆ

巻尾、朱、書、の、漢、語、あり、十四、卷、の、末、に、云

桂秋、仲、一、夜、校、了、於、蠲、痲、室、瓶、中、天、苑

蒼、然、吐、香、清、况、可、言、也、 蟻、洲、主人、後

九、卷、の、尾、に、云

乙未仲春二十四日病牀看之 蛭洲

九卷の尾ニ云

同桂秋初六日校過久雨始雷百虫噪奏鳴
夜色可玩也 昔首主人誌

四巻の末ニ云

甲辰中元校過了候命前之南軒時
月色清朗巾帳聲微耳根 柳巷子漫談

又云 乙未仲春二十四日病中一過 蛭洲主人

十七巻の末ニ云

乙巳夷則念六夜再校了時由聲響凡
新涼透衣 蛭洲漁者誌

廿一巻の尾ニ云

甲辰夷則小尽校了於柳箱こ北窓下

昔首主人

後述^其其時の枕の糸を^其裁す、亦校に数年ニ
及ぶこと干支ニ微きし、此集、枕箱の久しき見
ふし。

六月十四日記

○田中元勳伯も、早稲田の園者終、寄稿せられた玉
為、残瀬一巻の末歴ハ、いふまじ知ることを得るる
ル、川田由友江が或る人も預つたといふこと、文ハ、杉山
三郎から受へたこともあつたか、その以上のことを知
り得ずしむるも、いふ人、北沢川田、縁あり、山

田市郎、訓令せしむるを漸ゆく来歴の一斑か
九比。其の言ふ所たの如し

維新變遷の際上方迄の一擧九折にたり
秋月清海の文字、磯信花に令し以て、磯
ハ其の當推の世帯の玉置田とて見ても貴重
のよきとすし、其の指動さ終に、徳の三又け
て結花とて、磯信花母、林天山つ人のと、磯
清海を、道中雲、駒川田、赤丸、江、等と
同、和、宗の關係がある。の、次、六年、寅
秋月騷動が起つて、磯ハ自刃する。よ、
つ比、ハ、其の、夜、命の、時、家、族、に、老、命、を、
玉置田、決して、手、離、し、と、い、う、の、と、い、ひ、ぬ、

信つて、道、族、ハ、川、田、に、預、け、し、保、安、を、頼、ん、ぬ、
ある時、田中、伯、川、田、の、家、に、赴、き、と、見、し、令、
指、動、き、し、將、久、ん、こ、と、を、申、入、ん、川、田、の、磯、家、
と、交、渉、を、開、い、た、が、先、人、の、遺、令、も、あ、る、こ、と、
と、い、ふ、か、ら、流、れ、す、十、餘、年、を、経、て、漸、々、と、
田、市、郎、の、請、求、を、諾、し、ハ、る、田、の、價、を、以、
つて、の、次、廿、九、年、の、春、如、女、の、田、中、伯、の、三、子、
の、一、を、し、大、正、三、年、十、月、伊、豆、も、つ、ま、の、ま、由、
徳、士、の、別、荘、に、伯、と、余、と、令、法、の、折、早、稲、田、
ハ、其、の、野、を、流、こ、ん、ぬ、

六月十四日記

○陶器の内が古撲の味、高んびるよりの着し伊賀
であらう、茶人の七代伊賀を、最、七、孫、と、し、之、ん、を、孫、玩、

すうこと甚しけんは、陶器の鑑賞力が充分に興
んが解るべきあるものある。決して古撰の如くを以つ
て珠とするものもある。勿論伊賀の年代に於ては
形も古く其の創地は天平時代と云ふに
あふ、何れ故も天平とあるは珠と云ふ趣味界に
於て之れを古ものといふ點は珠として差支へある
まいけり。決して美なる單純のものあるは、他
賞玩するべき長所も特徴もあるものある。辛洲刃の
バ形も趣味ある。徑々エビツラうするものあり土
ま石が交つておどろして、美の今も缺るもの
ありやうも又ある。かゝるく趣味あるは、
流の味がある。何んともあつては、真放の氣が

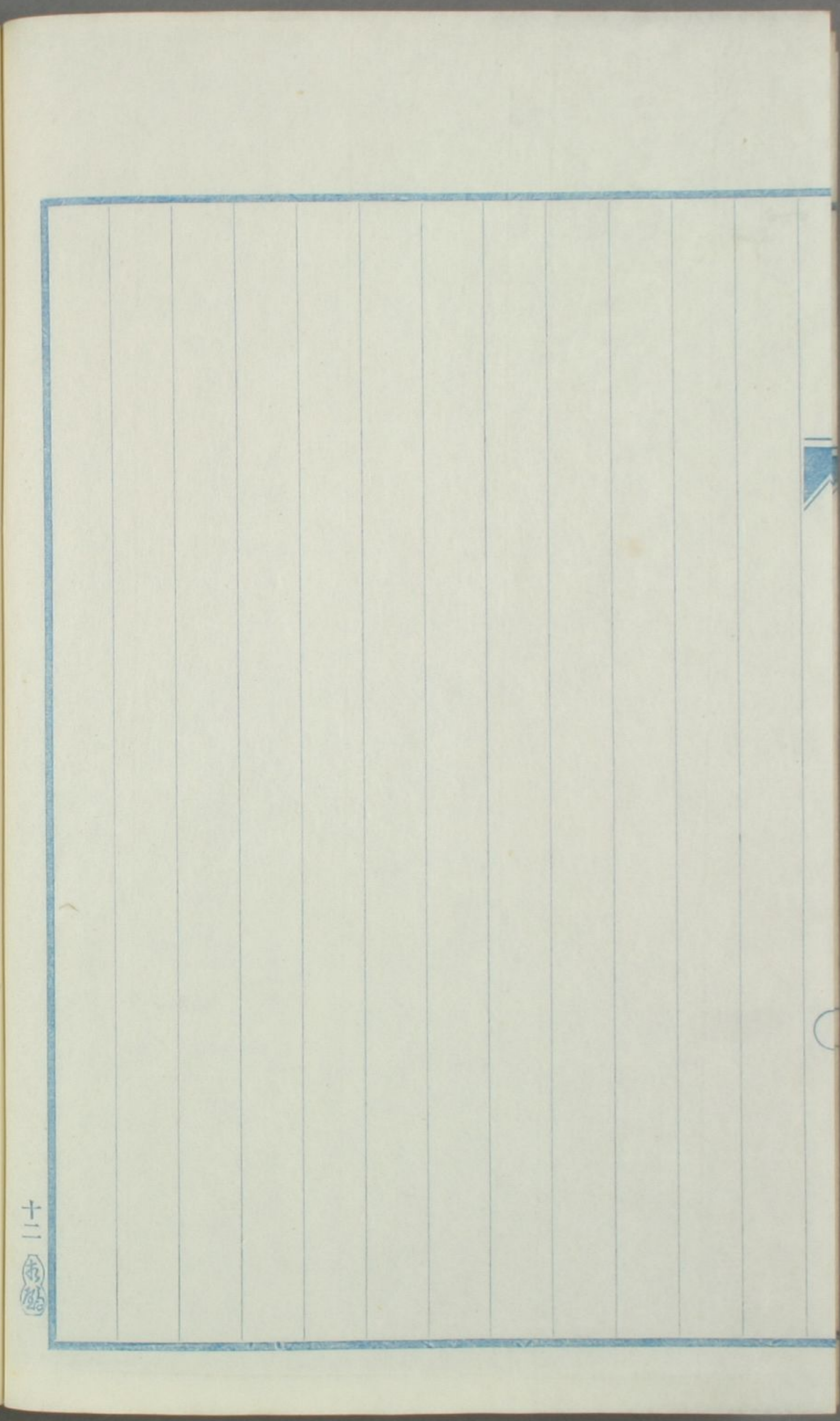
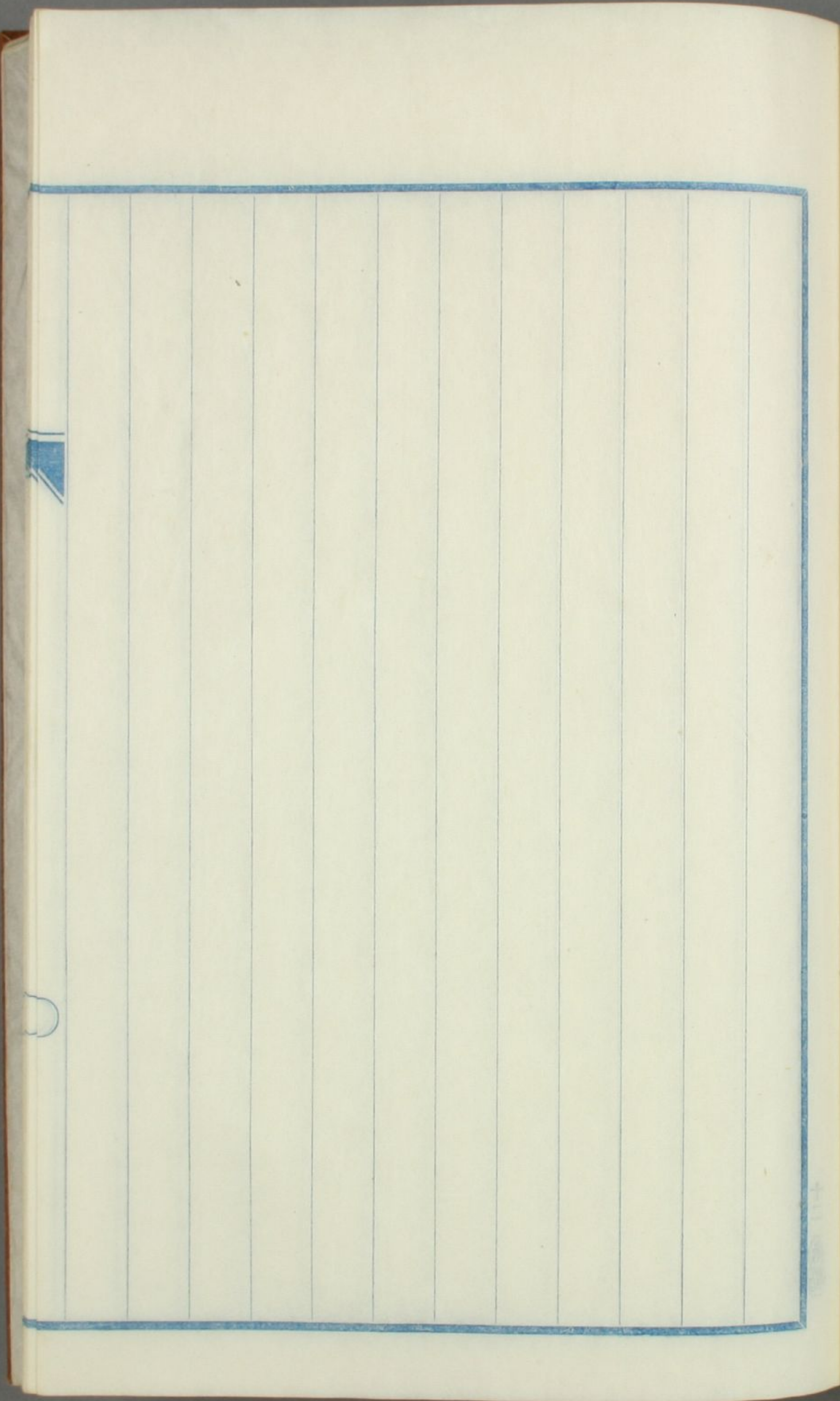
張つてある。家かう古武士の面目がある。其の形貌
も態度も雄大である。勿論時代によつて、其の表
現もあるが、男子的の豪快の素的質が、
ハんとある。伊賀の花紋や、
こゝろ一特徴として、腰の支え、深い籠目か
ある。こゝろ雄偉大膽な強い印象を與へる。腰は
ソコも、腰も大膽な筋目か、
柄のやうな縦横格子形の籠目を使つてある。
是れが皆此の器に、真放の味を與へる。伊賀の創
作は、此の頃の既、
面も、此の器を用ひてある。是れは、天の
味がある。是れ就ては、力の衝き、
目も、

色彩であるから、陶工の粘む塗つたよりの全うするつて、こゝろも自然の趣味があつた其の色彩は、豪華放つた地蒸りの形骸や雄健なる、荒目とよく調和してゐる、勿論自然に且つ偶然に出る色であるから、同じ色を出せることも出来難いものである。自然を愛する日本趣味は、こゝろに存する。之を伊賀の土の二種あるやうだが、白山の土と出来たよりの土は、か細かびしツツリとあり、赭の赤も、日や緑の赤も、七折合の其の色を寄附せしめるのである。此の土質の為め、又肌膏は温柔の味がある。珠は黒と水にひたすと、白地に見えること、の出来たるは、濡いがあつて得も云ふぬ、味がある。此伊賀だけ

ハ悲しく、又四換微目を免かた日本國のこののである。

二月十四日記

伊賀と面山の似る、信楽也。此創心年代、こゝろも伊賀に比し造か、後んたるよりのと、こゝろも、えんがし、が、此の研完、そのを、決して、伊賀と大なる年代の、ありと、えん、其の土を、えりたる山、伊賀の、えんと、橋、橋、し、あつた、こと、も、て、か、う、なる。



以下
7 丁
白紙



鳳栖内竹 春 小

